

京都大学大学院工学研究科案内

Kyoto University Graduate School of Engineering

2010

Civil and Earth Resources Engineering

Urban Management

Environmental Engineering

Architecture and Architectural Engineering

Mechanical Engineering and Science

Micro Engineering

Aeronautics and Astronautics

Nuclear Engineering

Materials Science and Engineering

Electrical Engineering

Electronic Science and Engineering

Material Chemistry

Energy and Hydrocarbon Chemistry

Molecular Engineering

Polymer Chemistry

Synthetic Chemistry and Biological Chemistry

Chemical Engineering



京都大学大学院工学研究科長

小森 悟

京都大学大学院工学研究科では、数学、物理学、化学、生物学などの自然科学分野の基礎研究と、これらの基礎研究を通じて解き明かした自然の仕組みについての知識を活用した多様な応用研究を展開しています。また、人文科学や社会科学の諸要素をも巧みに取り入れることにより、わたしたちの暮らしに利便性をもたらすだけでなく、豊かさを持続し得る社会の実現に向けた、安全性の確保や地球環境負荷の低減化などのための新しい技術の開発研究に取り組んでいます。

本研究科の大きな特色のひとつとして、工学と理学の間に明確な境界を設けず伝統的に基礎研究を重視していることが挙げられます。本研究科では、「学理はさておき、どのようにすれば目的を達成することができるか?」を考える世間一般で言われる工学的アプローチとは異なり、応用目的をもつ課題に対して、「なぜそのような現象が起こるのか?」を追及する、むしろ理学の立場を採ることから研究を始めて、課題解決の糸口を見いだす独自の研究スタイルを貫いています。この研究スタイルこそが、数多くの独創的でレベルの高い研究成果を産み出す活力であり、そのような研究現場で教育を実践し、ノーベル賞受賞者を含む幾多の有能な研究者や技術者を輩出してきたことに、私達は誇りを感じています。

現在、本研究科は、組織図に示した17専攻と7センターで構成されており、いずれの専攻もそれぞれの専門分野で国際的に高く評価される研究実績を残しています。また、これらの学術研究を進める土壌を媒介として、独創的な研究能力や技術開発能力を養う、高度で魅力ある大学院教育を実践しています。各専攻の研究内容や教育理念、さらに専攻を構成する大講座と研究分野については、この案内冊子に概要を紹介していますので、是非ご覧ください。

ところで、京都大学の起源は、日本最初の洋式病院である長崎養生所（1861年（文久元年）長崎に設立）の所内に分析研究所が附設され、長崎精得館と改称された1865年（慶応元年）に遡ることができます。当時の言葉で分析は化学（舎密）、究理は物理のことを指し、分析研究所とは理化学校の意味です。この理化学校は、1868年（慶応4年）に大阪へ移設されて舎密局（後の理学校）が開校され、1870年に洋学校（1869年開設）との合併により開成所となった後、その名称を変遷させながら、京都大学の前身である第三高等学校（1894年）に引き継がれました。こうして1897年6月18日の官制公布により、京都帝国大学が創設されることになりましたが、その当時、工科志望の学生が急増したため、最初に理工科大学が設置されました。わが国で第2番目の国立大学として創設された京都大学は、その歴史を辿ってみると、

理工学の高等教育・研究に対する国民の大きな期待を担った大学であったことがわかりいただけることでしょう。

多様な工学分野は、建学当初の精神を継承し、いつの時代も社会との接点を保ちつつ、異分野間の融合と新分野の創出を図り、いまなお進化発展し続けています。その変遷の歴史を眺めてみましょう。まず理工科大学の設立に当たり、数学、物理学、化学のような基礎科学分野の講座のほかに、土木工学、機械工学、電気工学、採鉱学、冶金学のような応用科学分野の講座が設けられました。その後、理科大学と分離された1914年の時点で、工科大学は土木工学科、機械工学科、電気工学科、採鉱冶金学科、製造化学科の5学科で構成されていました。1919年にその名称が工学部となった後、1920年に建築学科が新設され、ほぼ現在の工学部の基礎となった学科の形が整いました。これ以後、時代の要請に応えながら、次々に改組拡充が進み、1993年から1996年までの4年計画で実施された大学院重点化に伴い、広い分野に柔軟に対応し得る人材を養成する観点から、従来の工学部23学科は6つの大学科に統合されました。京都大学の制度として大学院が正式に設置されたのは1953年のことですが、大学院重点化を契機として、工学部各学科所属の157講座（小講座）は工学研究科に新設された25専攻の専任講座または基幹講座の専門分野に再編成され、附置研究所や研究センター等の協力講座を加えて、新時代に相応しい大学院の教育研究を実施するようになりました。さらに、大学院重点化は既存の研究科の改組と新しい研究科の創設を促した結果、工学研究科を構成していた専攻のいくつかもそれらの創設に参画して移行し、また専攻間の再編統合も進み、2005年以降の工学研究科は17専攻で運営されています。

以上のように本研究科は、不断に教育研究組織を見直し、国際社会で通用する効果的な大学院教育の制度設計と環境整備を通じて、現在もなお進化し続けています。その一環として、2003年に開校した桂キャンパスを工学研究科の新しい教育研究の場と定め、各系専攻の移転を順次進めています。桂キャンパスは4つのクラスターから成り、Aクラスターには電気系2専攻と化学系6専攻が、またCクラスターには建築学専攻と地球系3専攻がすでに配置され、全体計画のほぼ半数に当たる総合研究棟と附属施設が完成しました。桂キャンパスの完成時には約4,000人の学生・教職員を擁し、工学（Technology）と科学（Science）が融合するテクノサイエンス・ヒル

CONTENTS

- 1 大学院工学研究科への招待
- 3 入学案内
- 4 教育プログラム

各専攻の紹介

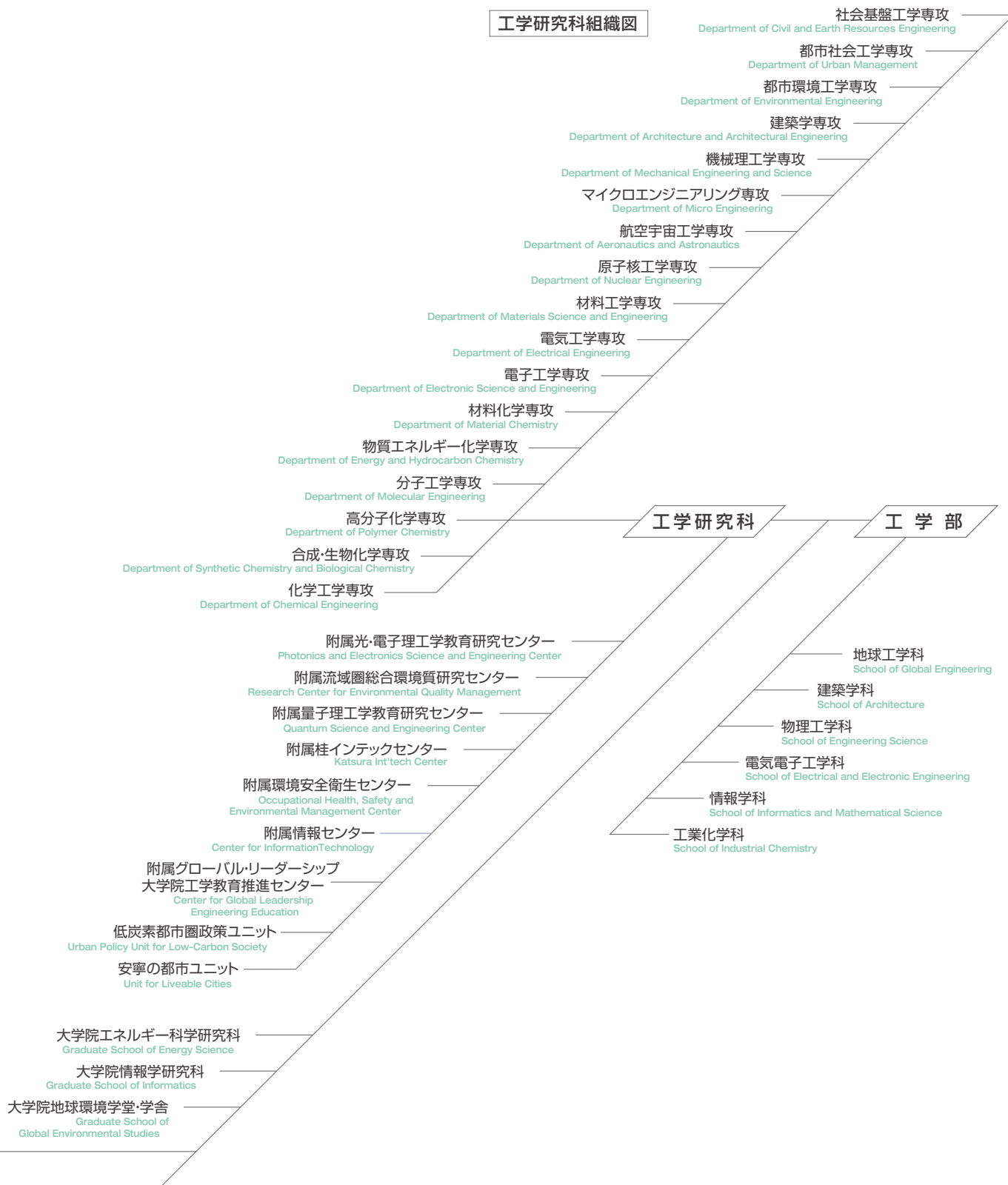
- 13 社会基盤工学専攻
- 15 都市社会工学専攻
- 17 都市環境工学専攻
- 19 建築学専攻
- 21 機械理工学専攻
- 23 マイクロエンジニアリング専攻
- 24 航空宇宙工学専攻
- 25 原子核工学専攻
- 26 材料工学専攻
- 27 電気工学専攻・電子工学専攻
- 29 材料化学専攻
- 30 物質エネルギー化学専攻
- 31 分子工学専攻
- 32 高分子化学専攻
- 33 合成・生物化学専攻
- 34 化学工学専攻

- 35 桂キャンパス
- 39 入学状況
- 40 修了者数・学位授与者数
- 41 アクセスマップ
  - ・吉田キャンパス
  - ・桂キャンパス
  - ・宇治キャンパス
- お問い合わせ先

として、国際水準の卓越した教育研究の推進拠点となることを内外に宣言しています。

この案内冊子を通じて、京都大学大学院工学研究科が果たしている学術文化への国際貢献、さらにはそれらの成果の社会還元など、大きな役割の一端に触れていただければ幸いです。そして、日本国内はもとより、広く諸外国からも、数多くの才能・豊かな人材が本研究科に入学を果たされ、創造性に満ちた研究能力を養い、国際社会で活躍し得る研究者・技術者に育たれることを期待しています。

**工学研究科組織図**



# 入学案内

## 入学資格について

1. 修士課程に入学することのできる人は、次のとおりです。
  - ①日本の大学を卒業した人
  - ②学校教育法第104条第4項の規定により学士の学位を授与された人
  - ③外国において、学校教育における16年の課程を修了した人
  - ④外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した人
  - ⑤我が国において、外国の大学の課程（その修了者が当該外国の学校教育における16年の課程を修了したとされるものに限る。）を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了した人
  - ⑥文部科学大臣が指定する専修学校の専門課程を文部科学大臣が定める日以後に修了した人
  - ⑦文部科学大臣の指定した人（昭和28年文部省告示第5号）
  - ⑧大学に3年以上在学した人（学校教育法第102条第2項の規定により、これに準ずる者として文部科学大臣が定める者を含む。）であって、本学において、所定の単位を優れた成績をもって修得したものと認めた人
  - ⑨本研究科において、個別の入学資格審査により、大学を卒業した人と同等以上の学力があると認められた人で、22歳に達した人
2. 博士後期課程に入学することのできる人は、次のとおりです。
  - ①修士の学位又は修士（専門職）若しくは法務博士（専門職）の学位を有する人
  - ②外国において、本学大学院の修士課程又は専門職学位課程に相当する課程を修了した人
  - ③外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、本学大学院の修士課程又は専門職学位課程に相当する課程を修了した人
  - ④我が国において、外国の大学の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が指定するものの当該課程（本学大学院の修士課程又は専門職学位課程に相当する課程に限る。）を修了した人
  - ⑤文部科学大臣の指定した人（平成元年文部省告示第118号）
  - ⑥本研究科において、個別の入学資格審査により、第1号に掲げる人と同等以上の学力があると認められた人で、24歳に達した人

## 社会人入学について

博士後期課程の入学の資格を満たしている人で、出願時において、官公庁、企業等に就職し、入学後も引き続きその身分を有する人で、所属長の推薦を受けた人については、特別選考により、博士後期課程に入学することができます。

## 入学期について

1. 博士後期課程において10月期入学及び4月期入学を実施しています。
2. 修士課程は4月期入学のみ実施しています。

## 修業年数について

1. 博士課程の標準修業年数は、5年です。前期2年の課程及び後期3年の課程に区分し、前期2年の課程を修士課程といい、後期3年の課程を博士後期課程といいます。
2. 修士課程の修業年数については、所定の単位を取得し、修士の学位申請論文が通常必要とされる水準を満たしており、学業成績が優秀である人は、1年以上の在学をもって修士課程を修了することができます。なお、在学年限は4年を超えることができません。
3. 博士後期課程の修業年数については、優れた研究実績を挙げた人は、1年（修士課程の修了要件を満たした人で、大学院における在学期間が2年未満のものにあつては、その在学期間を含めて3年）以上の在学をもって修了することができます。なお、在学年限は、6年を超えることができません。

## 学位の授与について

1. 修士課程を修了した人には、修士（工学）の、博士後期課程を修了した人には、博士（工学）の学位が授与されます。
2. 上記のほか、博士の学位の授与を申請して、博士論文の審査及び試験に合格し、かつ、学識の確認を経た人にも学位が授与されます。

## 桂キャンパス移転について

本研究科では、平成15年10月に化学系（材料化学専攻、物質エネルギー化学専攻、分子工学専攻、高分子化学専攻、合成・生物化学専攻、化学工学専攻）及び電気系（電気工学専攻、電子工学専攻）が、平成16年度に建築学専攻が、平成18年度に地球系（社会基盤工学専攻、都市社会工学専攻、都市環境工学専攻）が、桂キャンパス（京都市西京区）への移転を終えました。

物理系専攻（機械理工学専攻、マイクロエンジニアリング専攻、航空宇宙工学専攻、原子核工学専攻、材料工学専攻）は、吉田キャンパス（京都市左京区）に置かれています。両キャンパスの間には、シャトルバスが運行されており、所要時間は約55分です。

# 教育プログラム

## 博士課程前後期連携教育プログラムについて

工学研究科では平成20年度から、修士課程教育プログラムに加えて、修士課程入学と同時に博士学位取得をめざす人を対象に、修士課程と博士後期課程を連携する博士課程前後期連携教育プログラム（連携プログラム）を創設しました。修士課程入学と同時に連携プログラムを履修する人は5年型の、また修士課程2年次から履修する人は4年型の連携プログラムを履修します。5年型および4年型を履修する人は、修士課程修了時に所定の審査を経て修士の学位を得、博士後期課程に進学します。

修士課程教育プログラムを終えた人、あるいは既に修士学位を有する人等が博士学位をめざす場合は、博士後期課程に入学し、3年型の連携プログラムを履修します。

### (1) 融合工学コースと高度工学コース

連携プログラムは、既存の専攻を横断的に融合して創設される「融合工学コース」と、既存の専攻毎に設けられる「高度工学コース」に区分されます。

融合工学コースは、工学研究科に創設された高等教育院に開設されており、平成22年度は、7つの分野の連携プログラム（応用力学分野、発展的持続性社会基盤工学分野、物質機能・変換科学分野、生命・医工融合分野、人間・環境・デザイン分野、融合光・電子科学創成分野、および人間安全保障工学分野）が提供されています。既存の工学分野を横断する新しい融合領域、境界領域において、真理を探究し学術の発展に貢献すると共に、研究チームを組織し新たな研究をリードすることができる博士学位を有する研究者の育成をめざします。

高度工学コースは既存の専攻に開設されています。工学の基盤を支える学術分野において、真理を探究し学術の発展に貢献すると共に、研究チームを組織し新たな研究をリードすることができる博士学位を有する研究者の育成をめざします。

### (2) 履修指導および提供科目

連携プログラムを履修する人には、複数の指導教員により綿密な教育・研究指導が行われます。提供される科目等から、履修生の目的に応じたテイラーメイドカリキュラムを構成し、効率的かつ高密度の学修を進めます。専門分野の学識を深めるための科目群に加えて、専門分野を超える幅広い学識を修得するための科目群、課題を発見しその解決能力を育成するための実体験型科目群（共同研究型インターンシップ、On-the-Research Training等）が提供されます。

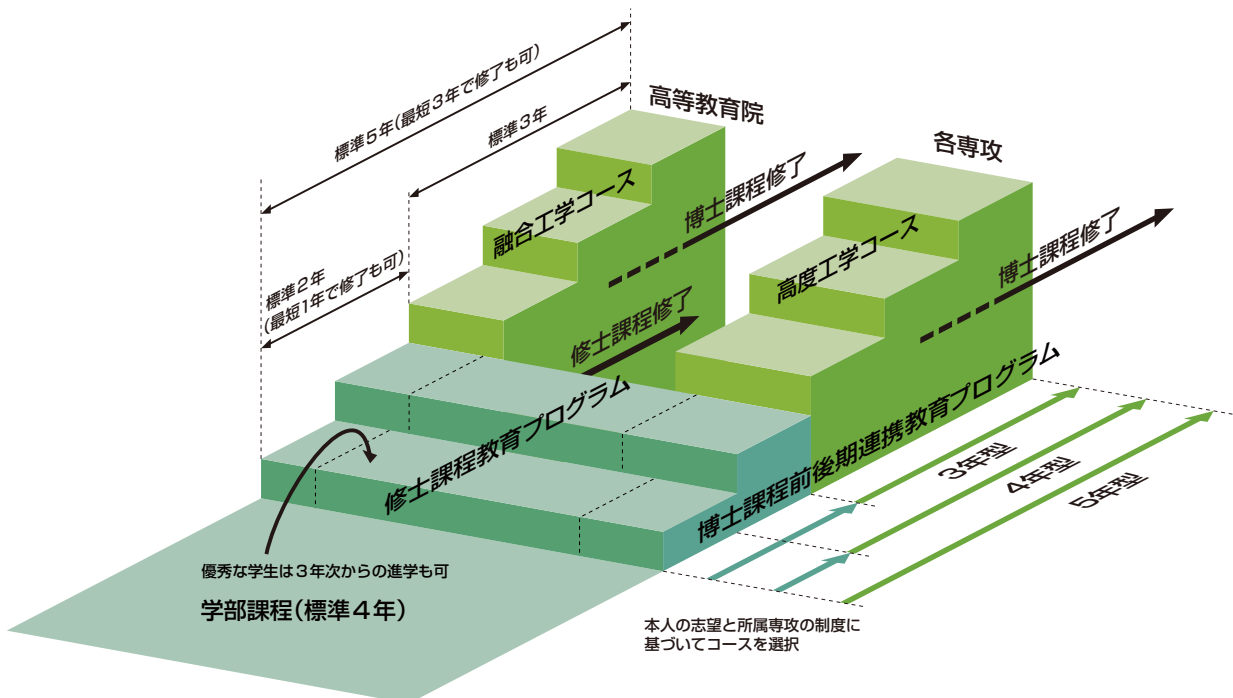
## 修士課程教育プログラムについて

修士課程教育プログラムは、既存の17専攻のそれぞれにおいて開設されています。各専門分野の基礎となる学識を修得すると共に、修士論文研究を通して研究の進め方を学びます。企業、研究機関、政府機関や国際機関等において活躍する研究能力を有する高度技術者の育成をめざします。

教育プログラムの目的、教育プログラムが提供される専攻および希望する教育プログラムを履修するための入試区分等の詳細については、募集要項を参照されるほか、不明の事項については巻末に記載されている「問い合わせ先」に照会して下さい。

## 入試日程

募集要項を参照して下さい。



## 工学研究科の 教育方針

学問の本質は真理の探求です。その中において、工学は人類の生活に直接・間接に関与する学術分野を担っており、地球社会の永続的な発展と文化の創造に対して大きな責任を負っています。京都大学大学院工学研究科は、この認識のもとで、基礎研究を重視して自然環境と調和のとれた科学技術の発展を先導するとともに、高度の専門能力と創造性、ならびに豊かな教養と高い倫理性を兼ね備えた人材を育成することをめざしています。

修士課程では、広い学識と国際性を修得させ、自ら課題を発見し解決する能力を有する高度技術者、研究者を、博士後期課程では、研究を通じた教育や実践的教育を介して、創造的研究チームを組織し新しい研究分野を国際的に先導することのできる研究者を育成します。この目的を達成するため、工学研究科では、修士課程教育プログラムに加えて、修士課程と博士後期課程を連携する教育プログラムを開設し、豊富な科目を幅広く提供します。

## 修士プログラムの 教育方針

### 社会基盤工学専攻

社会基盤工学専攻は、地球上の生命生息空間とそこにある構築物を対象とした、環境と調和して、安心・安全で活力ある持続可能な社会の創造をめざしています。そのために、必要な技術革新に挑戦し、新たな産業と文明を開くとともに、それを支える社会基盤の統合的な構築（アーキテクチャ）と資源エネルギー利用のための科学技術の推進と政策手法の構築を目標としています。すなわち、1) 工学基礎に基づく最先端科学技術の高度化、2) 自然災害のメカニズム解明と減災技術の高度化、3) 社会インフラの統合的なアーキテクチャとマネジメント技術の高度化、4) 発展的持続性社会における地殻・資源エネルギーの利用、5) 低炭素社会実現に向けた諸問題解決への寄与を探索し、人類の持続的発展と資源の安定供給、地域環境の創造と調和に技術的側面から貢献するための教育・研究を行います。同時に、徹底した基礎力と現実に即した応用力を育み、国際的かつ多角的な視野から、新しい技術を開拓できる能力と社会における複雑系の課題を柔軟に解決できる人材を育成します。

### 都市社会工学専攻

都市社会工学専攻は、地球・地域の環境保全を制約条件としながら、高度な生活の質を保証しうる、持続可能で国際競争力のある都市システムの実現をめざしています。そのために必要と考えられる、マネジメント技術、高度情報技術、社会基盤技術、エネルギー基盤技術などの工学技術を統合しながら、社会科学、人文科学の分野を包摂した学際的な視点より、都市システムの総合的なマネジメントを行うための方法論と技術体系の構築を目標としています。

すなわち、都市情報通信技術の革新による社会基盤の高度化、高度情報社会における災害リスクのマネジメント、都市基盤の効率的で総合的なマネジメント、国際化時代に対応した社会基盤整備、有限エネルギー資源論に立脚した都市マネジメントに係わる社会基盤・エネルギー基盤技術を基礎としながら、社会科学、人文科学の分野を含んだ総合的かつ高度な素養を身につけた、高い問題解決能力を有する技術者、研究者を育成します。

### 都市環境工学専攻

都市環境工学専攻では、地球環境問題および地域固有の環境問題の解決に貢献する技術者・研究者を育成します。より具体的には、顕在化/潜在化する地域環境問題の解決、健康を支援する環境の確保、持続可能な地球環境・地域環境の創成、新しい環境科学の構築を基本目標として、工学技術を基盤に、アジア地域を中心とした国際的研究フィールドを含む、環境問題の現場を重視した教育・研究活動と、医学・社会学・経済学から倫理学に及ぶ学際的なアプローチを通じて、人々の健康と安心を保証しつつ持続可能社会を支える総合的な学問体系を構築し、それに基づいた人材育成を行ないます。

### 建築学専攻

環境が急激に変化する中で、現代社会が要求する高度で多様な機能を持つ建築空間を実現するために、建築学における計画・構造・環境の各分野の基礎的部門の教育と研究を推進するとともに、建築を自然環境と生活環境のなかで総合的に捉え直した先端的な学問の教育・研究を行っています。こうした教育・研究によって、人間性豊かで幅広い視点から物事を捉えることができ、高度の専門能力と高い倫理性、ならびに豊かな教養と個性を兼ね備えた技術者、研究者を育成します。

### 機械理工学専攻

機械工学の対象はマイクロからマクロにわたる広範囲な物理系であり、現象解析・システム設計から製品の利用・保守・廃棄・再利用を含めたライフサイクル全般にわたります。本専攻は、それらの科学技術の中核となる材料・熱・流体等に関する力学（物理）現象の解析および機械システムの設計論に関する教育・研究

を行います。本プログラムでは、機械工学およびその基礎工学の研究者・技術者として、学問分野、産業界、社会で求められているニーズに応えるべく、基本的な機械工学およびそれに関連する基礎工学の学理を習得することを目的とし、深い洞察力と知的蓄積を背景にした豊かな創造力を有する研究者・技術者を養成します。

### マイクロエンジニアリング専攻

微小な機械システムは21世紀における人間社会・生活に大きな変革をもたらす原動力です。また、生体は最も精密な微小機械の集合です。本専攻は、それらのシステム開発の基礎となる微小領域特有の物理現象の研究をはじめ、微小機械に特有の設計・制御論に関する研究・教育を行ないます。ナノメートルオーダーに代表される微小領域特有の物理現象を解明し、ナノ材料・ナノ構造の作製・加工からマイクロメートルオーダーの微小な機械の構造および機構の作製をはじめ、微小機械システムの設計および開発等の広範囲な分野に通用する能力を有する、研究者・技術者を養成します。

### 航空宇宙工学専攻

宇宙は21世紀における最大のフロンティアであり、自由な飛行は時代を超えた人類の夢です。その開発と実現を担う航空宇宙工学は、未知なる過酷な環境に対峙する極限的工学分野であり、機械系工学の先端知識を総合した革新的アイデアを必要とします。本専攻は、革新的極限工学としての航空宇宙工学に関する研究とその基礎となる教育を行ないます。航空宇宙工学に関する技術的知識の習得よりも基礎学力向上のための教育を重視し、工学基礎全般にわたって十分な基礎学力とそれらを自在に使いこなす豊かな思考力と応用力・創造力を有し、航空宇宙工学をはじめとした先端工学の分野の進歩発展に貢献し先導できる研究者・技術者を育成します。

### 原子核工学専攻

原子核工学専攻では、素粒子、原子核、原子や分子、プラズマなど、量子の科学に立脚したミクロな観点から、量子ビーム、ナノテクノロジー、アトムテクノロジーなど最先端科学を切り開く量子技術を追究するとともに、新素材創製・探求をはじめとする物質開発分野、地球社会の持続的発展を目指すエネルギー・環境分野、より健やかな生活を支える生命科学分野等への工学的応用を展開しています。

体系的な教育カリキュラム、先端的な修士論文研究を通しての教育、そして実習やインターンシップ等の実体験に基づいて、ミクロの視点からの分析能力と高い問題解決能力を有する研究者、高度技術者の育成を目指しており、十分な専門基礎学力を有し、幅広い視野と明確な目的意識を備えた学生を分野を問わず受け入れます。

### 材料工学専攻

現代の高度技術社会を支えている先端材料のほとんどは、電子、原子、ナノ、ミクロといった階層構造を理解し、それを的確に制御することで初めて発現する特異な機能を利用したものです。この構造と機能に関係づける物理を理解すること、そして自然環境との調和を最大限配慮した材料開発のために必要となる包括的な学問体系が材料工学です。材料工学専攻の修士課程では、材料工学の基礎および応用分野における専門教育を行うと共に、研修や各種セミナー等に参加することを通じて幅広い知識の獲得と視野の拡大を図ります。さらに修士論文研究を通じて高い問題解決能力を有する研究者や高度技術者を育成します。

### 電気系専攻（電気工学専攻・電子工学専攻）

本系専攻においては、電気エネルギー、電気電子システム、光・電子材料とデバイス、電子情報通信などの専門分野における基礎学問の発展と深化、ならびに学際フロンティアの拡充と展開による創造性豊かな工学技術を構築することを目的とした教育と研究を行います。具体的には、電気エネルギーの発生・伝送・変換、超伝導現象の諸応用、大規模シミュレーション、自動制御、量子生体計測や、エレクトロニクスの深化と異分野融合による、超伝導材料、イオン・プラズマプロセス技術と応用、半導体機能材料、有機ナノ電子物性、電子・光・量子状態の制御などに関する教育と研究により、基礎から先端技術までの知識を修得して、工学技術開発の基本を体得し、豊かでフレキシブルな創造性と幅広い視点ならびに先進性を有する意欲的な先端技術研究開発者を育成します。

### 材料化学専攻

科学技術にもとづく社会の高度発展にともない、新物質や新材料開発に対する要請がますます強くなっていきます。これらが現在の生活および産業基盤を支えていること、また先端化学が将来果す役割にますます期待が膨らんでいることは明らかです。化学は、新物質を作る技術に加えて、物質を構成する分子の生い立ちや性質を調べ、物質特有の機能を探索する学問に変貌しつつあります。

材料化学専攻では無機材料、有機材料、高分子材料、ナノマテリアルを中心に、構造と性質を分子レベルで

解明しながら、新機能をもつ材料を設計するとともに、その合成方法を確立することを目的として研究・教育をおこなっています。修士課程では、広く材料化学全般にわたる基礎的な知識を習得し、無機材料化学、有機材料化学、あるいは高分子材料化学の分野で先端的な研究を進めることによって、化学工業をはじめとする産業界で研究開発に携る人材を育成すると同時に、博士後期課程に進学してさらに研究を深める人材を養成します。

### 物質エネルギー化学専攻

21世紀における人類の持続的発展のためには、最少の資源と最少のエネルギーを用い、環境への負荷を最小にして、高い付加価値を有する物質と質の良いエネルギーを得てこれを貯蔵する技術、資源の循環およびエネルギーの高効率利用をはかる技術の創成が必要とされています。このためには、物質とエネルギーに関する新しい先端科学技術の開拓が不可欠であり、物質変換およびエネルギー変換を支える化学は、その中心に位置する学術領域です。物質エネルギー化学専攻では、この要請に応えるために、高度な学術研究による学知の豊かな発展を通じて人類の福祉に貢献すること、社会が求める人類と自然の共生のための新しい科学技術を創造し、それを担う人材を育成することを目指しています。第一に学理の深化、第二にそれに基づいた創造性の高い応用化学の展開によって、課題設定、問題解決を自立的に行うことができ、かつ社会的倫理性の高い人材を育成します。

### 分子工学専攻

化学は物質の変換を扱う学問であるとともに、物性を電子構造・分子の配列と相互作用などとの関連で論じ、新しい機能をもつ分子や材料の設計を行う学問としてますますその分野を広げつつあります。分子工学は、原子・分子・高分子などがかかわる微視的現象を対象とする基礎学問を支柱として、原子・分子・高分子の相互作用を理論的、実験的に解明し、その成果を分子レベルで直接工学に応用する新しい学問領域であり、その重要性は化学の新しい展開の中で、強く認識されています。特にわが国では、分子工学による先端的技術の発展に大きな期待が寄せられています。新しい電子材料、分子生物学における機能性物質、高性能の有機・無機・高分子材料、高選択性触媒、エネルギー・情報関連材料などの開発などは、現在分子工学で対象とすべき重要な研究テーマです。

分子工学専攻は、分子論的視野に立ち、斬新な発想で基礎から応用への展開ができる研究者・技術者を育成します。

### 高分子化学専攻

高分子は、人類の現代生活を支える必需物資として、産業の基幹となる資材として、さらに化学・繊維から医療や電子産業、航空宇宙分野まで、豊かな社会と先端技術を実現する機能材料として、幅広い領域に展開しています。21世紀に入り、高分子が活躍する分野はますます拡大し、人間社会における重要性も増大するものと思われれます。本専攻は、このような高分子の生成、反応、構造、物性、機能について基礎研究をおこなうとともに、その成果を社会に還元し、関連する学術分野との連携を通して、新たな科学技術の創成に貢献することを目指しています。また、高分子を基礎とする先端領域において活躍できる独創的な研究能力を備えた研究者、技術者を養成します。

### 合成・生物化学専攻

化学やバイオにおいては科学(サイエンス)と技術(テクノロジー)は紙の表裏の関係にあり、お互いがきわめて密接に関連しています。「化学」は資源枯渇・環境負荷への対応や生活の質の向上など、人類の福祉に直接関わっており、その重要性は今後ますます増大するものと考えられます。合成・生物化学専攻の修士プログラムにおいては合成化学、生物化学およびそれらの融合分野の基礎から最先端にわたる教育と研究を通じ、材料、情報、エネルギー、環境、食品、医薬などを含む広範囲の化学領域の研究・開発を先導し、持続可能な社会の実現に貢献できる人材を育成します。

### 化学工学専攻

化学工学は、基礎科学の成果をより迅速に、かつ環境に配慮しながら生産活動や社会福祉として結実するための基盤工学です。21世紀に求められている高度で複雑な機能性物質・材料の開発、エネルギー・環境と調和した各種生産装置・技術の開発などの多様な要求に対応します。修士課程では、この基盤工学の骨格を講義を通じて学ぶとともに、世界最先端の研究に従事することによってその真髄を習得します。これらの教育・研究を実施する過程で、教員との議論、学生間の議論、教員・外部の技術者・他の学生との共同研究、学会での発表等を通じて、上級技術者としての意思疎通能力、協調能力、提案能力、発表能力、倫理観等を養います。

さらに、TA(Teaching Assistant)などの形で教育補助を行い、指導者としての要件を体得します。本課程では、これらの素養を備えた高級技術者を育成することによって、社会の発展に寄与します。



# 融合プログラムの 教育方針

## 応用力学分野

学界や産業界における機械工学分野ならびに化学工学分野の研究者および高度技術者には、熱・物質・運動量の移動が絡む複雑現象を理解でき、そこで生み出される機能性材料・機械構造物・機械システム・化学プロセス・エネルギー変換プロセスの設計および性能評価と、物と人が織り成す動的な複雑現象をシステムとしての戦略的思考のもとに制御・管理できる能力が必須のものとして要求されます。これらは機械工学分野の技術者のみではなく、基盤・先端技術をもって社会を支えている複数の工学分野（航空、原子核、材料、環境、土木等）でも必須であり、その能力養成には流体力学、熱力学、材料力学、制御工学に関する基礎学問の教育が必要です。

世界的に通用する教員が、上記4つの基礎学問に関する系統的講義はもとより、高等研究院およびオープンラボの協力を得て行う先端的研究を通して高等教育を施し、機械系専攻のみならず、化学工学専攻・原子核工学専攻等の専攻に所属の融合工学コース博士課程学生に対しても知識を教授していくことで、領域横断的な普遍的問題を理解でき、バランスのとれた若手研究者および高度技術者を養成します。

## 発展的持続性社会基盤工学分野

21世紀は人類社会の持続的な発展と自然環境との共生を可能とする新しい科学技術の世紀であります。安心、安全で活力があり、国際競争力のある社会を保全創出するため、基礎的な科学的解明に基づき社会基盤及び環境を維持・発展させてゆく学理・技術体系が求められています。発展的持続性社会基盤工学プログラムでは地球環境、基礎的科学・工学、社会環境及び生態系を含む自然環境に関する学理・技術を学際的に学び、将来の問題を自発的に発見し、課題を自ら解決でき、さらに革新的な技術の研究開発を担うことのできる研究・技術者を養成することを目指しています。そして、社会基盤、資源エネルギー、防災、環境や都市科学の知識のみでなく広く工学の基礎とその先端的应用を学び、意欲的に研究開発に取り組む人、さらに国際的なリーダーシップを発揮して世界で活躍を目指す人材を養成します。

## 物質機能・変換科学分野

物質機能・変換科学は21世紀の科学・技術を担う最先端の分野であり、人類社会の持続的な発展にとっても、必要・不可欠です。本分野では、有機、無機、高分子、金属、生体関連物質などの幅広い物質や材料の構造、物性、機能、変換過程などに関する教育を行います。世界をリードする複数の教員による指導のもと、各学生の希望や学力背景に応じたテイラーメイドカリキュラムによりきめ細かい教育を行うとともに、指導教員の所属する専攻にとらわれることなく、幅広い知識と視野を獲得できる融合的な教育環境を提供します。

さらに、新規な高機能物質の精密設計や変換に関わる研究、材料の力学的、熱的、電子的、光学的、化学的、生命科学的特性に関わる研究、サブナノメートルレベルからメートルレベルにいたる物質構造やその形成に関わる研究、環境の保全や環境に調和した生産技術に関わる研究などを通じて、高度な問題提示能力や、問題解決能力を持つ学生を養成します。

コア科目などの魅力的な講義や演習による教育に加えて、京都大学・連携企業・国際的研究機関等における最先端の研究の実践を通じた教育 (ORT: On the Research Training) やインターンシップ・セミナーなどを含む多面的なカリキュラムを提供します。このような充実したカリキュラムを通じて、高い倫理観を備え、物質や材料に関する幅広い基礎学力と広い視野に裏打ちされた独創的な課題設定能力および解決能力を身につけ、新発見・発明への高い意欲と国際性をもち、リーダーとして社会に貢献できる研究者・技術者を養成します。

## 生命・医工融合分野

工学と医学の連携は様々な領域で進められています。工学を基礎として医学・生命科学分野との融合領域における学理および技術を学び、革新的な生体・医療技術の研究開発能力を有する研究者・技術者および研究リーダーを養成します。

本分野はバイオナノ・先端医学物理・ケミカルバイオロジー・バイオマテリアル等の領域からなっており、豊富な講義科目と演習および国内外の研究機関や企業におけるORT (On the Research Training) やインターンシップ等により、幅広い学識と国際性を養います。特に工学・物理・化学・医学・理学・生物学の連携により、幅広い教育プログラムを提供するとともに、先端医学物理領域では医療現場における臨床研修によって実践能力を養います。

### 1) バイオナノ領域

工学と医学・生物および細胞・分子との融合領域であるナノメディシン領域とナノバイオ領域や再生医療領域を対象とし、MEMS (Micro Electromechanical Systems)、マイクロTAS (Total Analysis Systems) 等のナノデバイスをを用いた先端技術の研究と教育を行います。

## 2) 先端医学物理領域

量子物理工学者と放射線専門医等の連携により幅広い量子物理工学の素養と最先端のがん治療および高度な画像診断等についての医学・医療の経験を総合し、革新的な医療技術・機器の開発、品質保証、放射線安全等に関する医学物理学的課題の研究と教育を行います。

## 3) ケミカルバイオロジー領域

化学と分子生物学を基盤として化学 / 生物学 / 分子 (生物) 工学 / 医学との融合領域であるケミカルバイオロジーとナノバイオサイエンス・テクノロジーと対象とした先端科学技術の研究教育を行います。

## 4) バイオマテリアル領域

治療、予防、診断あるいは再生医療などの先端医療に不可欠であるバイオマテリアル (医用材料・デバイス、再生誘導用材料、ドラッグデリバリーシステム (DDS) 材料など) の設計、合成、化学的・物理的性質の解析、ならびにそれらの生化学的、生物医学的な評価など、生体機能をもつ材料の開発を、高分子化学、材料化学、医学、生物学の見地から融合的に研究し、活躍できる人材を育成する教育を行います。

## 人間・環境・デザイン分野

21世紀を迎えて、自然環境の破壊、構築環境におけるアメニティの喪失、地域固有の文化の崩壊など、さまざまな問題が発生しています。これらの問題を解決し、地球環境時代における人類社会の持続的な発展と文化の継承・創造に貢献するために、個々の人工物にとどまらず、自然・人間との関係を含む総体としての環境をデザインする方法を探求し、人間生活の基盤である建築とそれを取り巻く環境とが調和した社会を構築することを目指します。

人間が安全・健康で快適な暮らしを営むことができる生活環境をデザインするために、建築・環境に関わる諸領域はもとより、広く理工学の諸領域、及び人文社会科学・芸術との融合を図り、幅広い学識に支えられた創造的先端的研究能力や多様な要素をシステムに組み立てる総合力を備え、高い倫理性を有する研究者や高度専門技術者を育成します。本分野では、豊富な講義科目、演習科目、企業・政府・国際機関との連携による ORT(On the Research Training) やインターン等の多様な教育プログラムを用意し、総合的な学識と柔軟な実践力を身につけ、国際的にも活躍できる人材を育成します。

## 融合光・電子科学創成分野

21世紀においては全世界規模で情報処理量とエネルギー消費が爆発的に増大し、既存の材料・概念で構成されるハードウェアの性能限界と地球資源の枯渇が顕著になると予測されています。このような課題の解決に貢献し、光・電子科学分野で世界を先導するためには、電気エネルギー・システム工学、電子工学、量子物性工学、材料科学、化学工学、光機能工学、集積システム工学、量子物理工学など複数の異分野を融合して新しい学術分野を開拓し、かつ当該分野を牽引する若手研究者、高度技術者を育成することが重要です。

本教育プログラムでは、光・電子科学に関わる融合領域を開拓する教育研究を通じて、新しい学術分野における高い専門的知識・能力に加えて、既存の物理限界を超える概念・機能を創出する革新的創造性を備えた人材の育成を目指します。究極的な光子制御による新機能光学素子や高効率固体照明の実現、極限的な電子制御による耐環境素子や超集積システムの実現、光・イオン・プラズマを用いた新機能素子や新規プロセスの開発、強相関電子系物質や分子ナノ物質の創成と物性制御、高密度エネルギーシステムの制御とその基礎理論、新しい物理現象を用いたナノレベル計測とその学理探求などの融合分野において、常に世界を意識した教育研究を推進します。様々な分野で世界的に活躍する教員による基盤のおよび先端的な講義、各学生の目的に応じたテラーメイドのカリキュラムやインターンシップ等を活用した教育、光・電子理工学教育研究センターや高等研究院 (光・電子理工学) の協力を得て行う先端的融合研究を通じて、広い視野と高い独創性、国際性、自立性を涵養し、光・電子科学分野を牽引する人材を育成します。

## 人間安全保障工学分野

今後15年で、人口は1000万人以上の都市域人口は、世界全域では50%増加し、中でもアジア地域では65%の増加、東南アジアでは170%増加と極めて急速な増加が予測されています。これら広域的な人口集中を呈する都市におけるベーシック・ヒューマン・ニーズの未充足、環境汚染の増大、異常気象や地震等による災害リスクの増加、これらの脅威に対する個人及びコミュニティ・レベルでの自立的対応能力の欠如は人間の生存・生活への大きな脅威となっています。しかし、これまでは技術、制度、運営、管理、カバンス及びそれらを体系的にマネジメントする学理体系と人材整備の大きな遅れのため、これらの脅威に対し、十分な対応ができていないというのが現状です。このような問題を解決していくためには都市管理戦略や都市政策策定などの次元を含む総合的な学問に基づいた教育が必要です。人間安全保障工学分野では、「都市

## 高度工学コースの 教育方針

の人間安全保障工学」、すなわち「市民の生活を、ミレニアム開発目的などに代表される日々の都市生活に埋め込まれた非衛生・不健康及び大規模災害・大規模環境破壊などの脅威から解放し、各人が尊厳ある生命を快適に全うすることができる都市と都市群をデザイン・管理する技術（技法）の体系」を支えるコア領域と4つの学問領域（都市ガバナンス、都市基盤マネジメント、健康リスク管理、災害リスク管理）について、複数年に跨がって確実な素養を獲得させ、それらを都市の人間安全保障確保に向け目的に応じて統合化し適用する能力と、その技法を深化・進展しうる能力を持った研究者及び高度な技術者を養成します。

### 社会基盤工学専攻

社会基盤工学専攻は、地球上の生命生息空間とそこにある構築物を対象とした、環境と調和して、安心・安全で活力ある持続可能な社会の創造をめざしています。そのために、必要な技術革新に挑戦し、新たな産業と文明を開くとともに、それを支える社会基盤の統合的な構築（アーキテクチャ）と資源エネルギー利用のための科学技術の推進と政策手法の構築を目標としています。すなわち、1)工学基礎に基づく最先端科学技術の高度化、2)自然災害のメカニズム解明と減災技術の高度化、3)社会インフラの統合的アーキテクチャとマネジメント技術の高度化、4)発展的持続性社会における地殻・資源エネルギーの利用、5)低炭素社会実現に向けた諸問題解決への寄与を探索し、人類の持続的発展と資源の安定供給、地域環境の創造と調和に技術的側面から貢献するための教育・研究を行います。同時に、徹底した基礎力と現実に即した応用力を育み、国際的かつ多角的な視野から、新しい技術を開拓できる能力と社会における複雑系の課題を柔軟に解決できる人材を育成します。

### 都市社会工学専攻

都市社会工学専攻は、地球・地域の環境保全を制約条件としながら、高度な生活の質を保証しうる、持続可能で国際競争力のある都市システムの実現をめざしています。そのために必要と考えられる、マネジメント技術、高度情報技術、社会基盤技術、エネルギー基盤技術などの工学技術を統合しながら、社会科学、人文科学の分野を包摂した学際的な視点より、都市システムの総合的なマネジメントを行うための方法論と技術体系の構築を目標としています。

すなわち、都市情報通信技術の革新による社会基盤の高度化、高度情報社会における災害リスクのマネジメント、都市基盤の効率的で総合的なマネジメント、国際化時代に対応した社会基盤整備、有限エネルギー資源論に立脚した都市マネジメントに係わる社会基盤・エネルギー基盤技術を基礎としながら、社会科学、人文科学の分野を含んだ総合的かつ高度な素養を身につけた、高い問題解決能力を有する技術者、研究者を育成します。

### 都市環境工学専攻

都市環境工学専攻では、地球環境問題および地域固有の環境問題の解決に貢献する研究・技術者を育成します。より具体的には、顕在化/潜在化する地域環境問題の解決、健康を支援する環境の確保、持続可能な地球環境・地域環境の創成、新しい環境科学の構築を基本目標として、工学技術を基盤に、アジア地域を中心とした国際的研究フィールドを含む、環境問題の現場を重視した教育・研究活動と、医学・社会学・経済学から倫理学に及ぶ学際的なアプローチを通じて、人々の健康と安心を保証しつつ持続可能社会を支える総合的な学問体系を構築し、幅広い基礎学力、問題設定・解決能力および高い倫理観を備えたこの分野の次世代のリーダーとなる研究者・技術者を育成します。

### 建築学専攻

建築系専攻では、5年型および4年型の連携プログラム高度工学コースを平成23年度以降に設置することを検討しています。建築系専攻において博士学位の取得を目指す皆さんは、修士課程修了後に連携プログラム高度工学コース3年型にお進み下さい。

### 機械理工学専攻

機械工学の対象はマイクロからマクロにわたる広範囲な物理系であり、現象解析・システム設計から製品の利用・保守・廃棄・再利用を含めたライフサイクル全般にわたります。本専攻は、それらの科学技術の中核となる材料・熱・流体等に関する力学（物理）現象の解析および機械システムの設計論に関する教育・研究を行います。未知の局面において、従来の固定観念や偏見にとらわれない自由で柔軟な発想とダイナミックな行動力を有するとともに、機械工学の基礎となる幅広い学問とその要素を系統的に結びつけるシステム設計技術を融合させることができ、かつ、新しい技術分野に果敢に挑戦する、研究者・技術者群のリーダーを育成します。

## マイクロエンジニアリング専攻

微小な機械システムは21世紀における人間社会・生活に大きな変革をもたらす原動力です。また、生体は最も精密な微小機械の集合です。本専攻は、それらのシステム開発の基礎となる微小領域特有の物理現象の研究をはじめ、微小機械に特有の設計・制御論に関する研究・教育を行ないます。ナノ・マイクロエンジニアリングのみならず医学・生命科学分野をはじめとする多くの分野に関連することから、本専攻では、機械工学を取り巻く異分野との融合領域における研究者を育成します。

## 航空宇宙工学専攻

宇宙は21世紀における最大のフロンティアであり、自由な飛行は時代を超えた人類の夢です。その開発と実現を担う航空宇宙工学は、未知なる過酷な環境に対峙する極限的工学分野であり、機械系工学の先端知識を総合した革新的アイデアを必要とします。本専攻は、革新的極限工学としての航空宇宙工学に関する研究とその基礎となる教育を行ないます。近年の先端工学の発展には、その高度化・複雑化に伴い、従来の工学分野の融合と新分野の創成が不断に求められています。機械系工学群として提供されるより広く多彩な科目およびセミナー科目においてさらに研鑽を深め、より広い視野とより自在で積極的な思考力・応用力をあわせもつ航空宇宙工学分野の高レベルの研究者・技術者を育成します。

## 原子核工学専攻

原子核工学専攻では、素粒子、原子核、原子や分子、プラズマなど、量子の科学に立脚したミクロな観点から、量子ビーム、ナノテクノロジー、アトムテクノロジーなど最先端科学を切り開く量子技術を追究するとともに、新素材創製・探求をはじめとする物質開発分野、地球社会の持続的発展を目指すエネルギー・環境分野、より健やかな生活を支える生命科学分野等への工学的応用を展開しています。

一貫した教育カリキュラム、自主性を尊重した研究指導、そして国内外の研究機関等との連携のもとに、ミクロの視点からの創造的分析能力とシステムとしての戦略的思考能力を有する先端的研究者の育成を目指しており、十分な専門基礎学力を有し、幅広い視野と明確な目的意識を備えた学生を分野を問わず受け入れます。

## 材料工学専攻

現代の高度技術社会を支えている先端材料のほとんどは、電子、原子、ナノ、ミクロといった階層構造を理解し、それを的確に制御することで初めて発現する特異な機能を利用したものです。この構造と機能とを関係づける物理を理解すること、そして自然環境との調和を最大限配慮した材料開発のために必要となる包括的な学問体系が材料工学です。これまでに材料工学専攻では、わが国の基幹産業分野の中核を担う高等研究者・技術者を多数輩出してきました。これをさらに発展させ、次世代の科学技術分野において世界のリーダーとなる人材を育成します。

## 電気系専攻（電気工学専攻・電子工学専攻）

高度でインテリジェントな将来型情報通信社会を実現するために必要なハードウェア技術の基礎から最先端研究レベルまでの学習と、デバイスからシステムに至るまで、発展する電気電子フロンティア基盤科学技術の修得を通して、広範な科学知識とフレキシブルな創造性を備えた豊かな人材を育成します。このプログラムの推進する教育および研究は、光においては、任意の波長、強度、方向の、発光および受光を可能にして光を自在にあやつり、電子においては、これまでの概念を超えるデバイスや量子効果などを通して、光と電子を極限まで制御することとその理解を目的とします。フォトリソグラフィやワイドギャップ半導体、分子ナノデバイスや量子凝縮系デバイスなどの新規材料・デバイス創成、パワーデバイス、電子・光・イオン・プラズマによる革新的ナノプロセス、集積システム、環境エネルギーシステムとその制御、量子生体計測など、世界でトップクラスの研究成果をあげている分野で教育と研究を推進することにより、博士号取得の段階で、自立し、幅広い専門知識を有し、国際的に通用する一流の人材を育成します。

## 材料化学専攻

科学技術にもとづく社会の高度発展にともない、新物質や新材料開発に対する要請がますます強くなっています。これらが現在の生活および産業基盤を支えていること、また先端化学が将来果す役割にますます期待が膨らんでいることは明らかです。化学は、新物質を作る技術に加えて、物質を構成する分子の生い立ちや性質を調べ、物質特有の機能を探索する学問に変貌しつつあります。材料化学専攻では無機材料、有機材料、高分子材料、ナノマテリアルを中心に、構造と性質を分子レベルで解明しながら、新機能をもつ材料を設計するとともに、その合成方法を確立することを目的として研究・教育をおこなっています。博士後期課程では、独創的な発想と明敏な洞察力により積極的に材料化学の新領域を切り拓く能力をもった化学者・化学技術者を育成します。

## 物質エネルギー化学専攻

21世紀における人類の持続的発展を可能とするためには、科学技術の質的発展、とりわけ、最少の資源と最少のエネルギーを用い、環境への負荷を最小にして、高い付加価値を有する物質と質の良いエネルギーを得てこれを貯蔵する技術、資源の循環およびエネルギーの高効率利用をはかる技術の創成が必要とされています。このためには、物質とエネルギーに関する新しい先端科学技術の開拓が不可欠であり、物質変換およびエネルギー変換を支える化学は、その中心に位置する学術領域です。物質エネルギー化学専攻では、この要請に応えるために、高度な学術研究の実践による学知の豊かな発展を通して人類の福祉に貢献すること、社会が求める人類と自然の共生のための新しい科学技術を創造し、それを担う人材を育成します。

このために、第一に、基礎化学の系統的な継承と学理の深化、第二にそれに基づいた創造性の高い応用化学の展開を通じて、上記の学術活動を行います。また、創造的で当該分野を質的に発展させる契機をもたらすスケールの大きな先端的研究、世界をリードする研究を目指すと共に、問題発見、課題設定、問題解決を自律的に行うことができ、かつ社会的倫理性の高い人材を継続的に育成することを目標としています。

## 分子工学専攻

分子工学専攻では物理化学的な見地に基づき、生体物質から、有機物質、電子物質、さらに無機物質に至るまでの広範な物質群を対象として、分子化学、分子工学に関する基礎科学を追及すると共に、時代が必要とする先端技術の開拓をする事を目的として、研究・教育を行っています。博士課程では、豊かな総合性と国際性を有し、分子に対する本質的理解と広範な知識に基づいて独創的な研究・技術開発を推進する能力を有する化学者の育成を目的としています。また主体的に実験を計画、立案し、実験を行い、国際的に発信できるような高度な研究者・技術者を育成します。

## 高分子化学専攻

高分子化学専攻は、高分子の基礎的科学(合成、反応、物性、構造、機能)に関する研究を行うとともに、高分子関連の新材料創出と新たな科学技術の開発を目指し、自然や社会と調和した生活の向上に貢献することを使命としています。そのため、材料、生命、医療、環境、情報、エネルギーに係わる分野を含めて、幅広い領域に展開しています。21世紀に入って高分子が活躍する分野はますます拡大し、社会における重要性も増大しています。本専攻では、広く正確な知識の習得、基礎学力と思考力の養成、高度技術の修得の3つの目標をもとに教育を行い、相互に有機的関連を持たせたカリキュラムのもとで、高分子を基盤とする先端科学技術領域において国際的に活躍できる独創的な研究能力と豊かな人間性を備えた研究者、技術者を養成します。

## 合成・生物化学専攻

合成化学と生物化学は独自の発展を遂げてきましたが、近年両者のバリアは急速に狭まる状況にあります。合成・生物化学専攻の高度工学コースにおいては合成化学と生物化学を基軸にした学際領域の開拓を目指しています。専攻全体として電子レベル/分子レベル/ナノレベル/マイクロレベル/バイオレベルでの電子状態/分子構造/反応/物性/機能/システムの発現と制御をそれぞれのレベルにおける最先端の方法論と理論を駆使した創造性豊かな総合精密化学として推進し、次代を担う人材を育成するとともに、健全な自然観・生命観の醸成と持続可能な社会の実現のための新産業基盤技術の創出を目指した研究・教育を推進します。

## 化学工学専攻

化学工学は、基礎科学の成果をより迅速に、かつ環境に配慮しながら生産活動や社会福祉として結実するための基盤工学であり、多様な要求に対応することが求められます。高度工学コースでは、高い教養と人格を備えた研究者・上級技術者として独立して活動するための実践的訓練を行い、高度な専門知識と柔軟な思考力、および豊かな想像力を修得します。より具体的には、研究テーマの選定、研究の計画、実施、発表の過程を可能な限り自主的に進めることにより、世界的に評価される創造的な研究を常に遂行することを可能にします。さらに、他専攻、他研究科、国外研究機関との共同研究の機会を積極的に活かし、協調能力、提案能力、発表能力、国際性を身につけます。またTAのほか、学部の特別研究の指導などにも参加し、研究指導者としての能力を身につけることができます。これらを通じて、高度工学コースでは、高度な研究遂行能力をもった国際的に活躍できる研究者、新たな化学工学の基盤を創製できる研究者、さらには研究をマネジメントできる指導者を育成します。

# 社会基盤工学専攻

Department of Civil and Earth Resources Engineering

## 専攻の概要

主に地球上の生命生息空間とその中の構築物を対象として、工学基礎の立場から、環境と調和して、安心・安全で活力ある持続可能な社会の創出のために必要な技術革新に挑戦し、新たな産業と文明を開くとともに、それを支える社会基盤を支援する科学技術の発展に貢献する。特に、1) 工学基礎の立場からの最先端技術、2) 安全・安心で環境と調和した潤いのある社会基盤整備の実現、3) 地殻資源の持続的な利用に重点を置き、持続性社会の再生と構築、安心・安全な社会の構築創造、温暖化やエネルギー確保に関連して低炭素社会の実現、資源リサイクル、豪雨・地震など巨大災害の軽減、福祉長寿社会のための先端学理

の発展、国際的人材育成を目指す。

## 社会基盤工学専攻の目指すもの

社会基盤工学専攻の目指すものは次の5つに集約される。

### 1) 工学基礎 (Engineering Science) に基づく実験、計算科学の高度化

近年の地球環境問題の深刻化とエネルギー問題の顕在化は、工学的課題をより広範かつ複雑なものに変質させるとともに、地球規模問題の機動的解決に資する成果が求められる次元へと急速に変化し、実現象との比較を通じて、現実的かつ応用・展開性を常に意識した取り組みがさらに重要となっている。マルチフィジックスシミュレーション技術の構築を喫緊の課題ととらえ、工学基

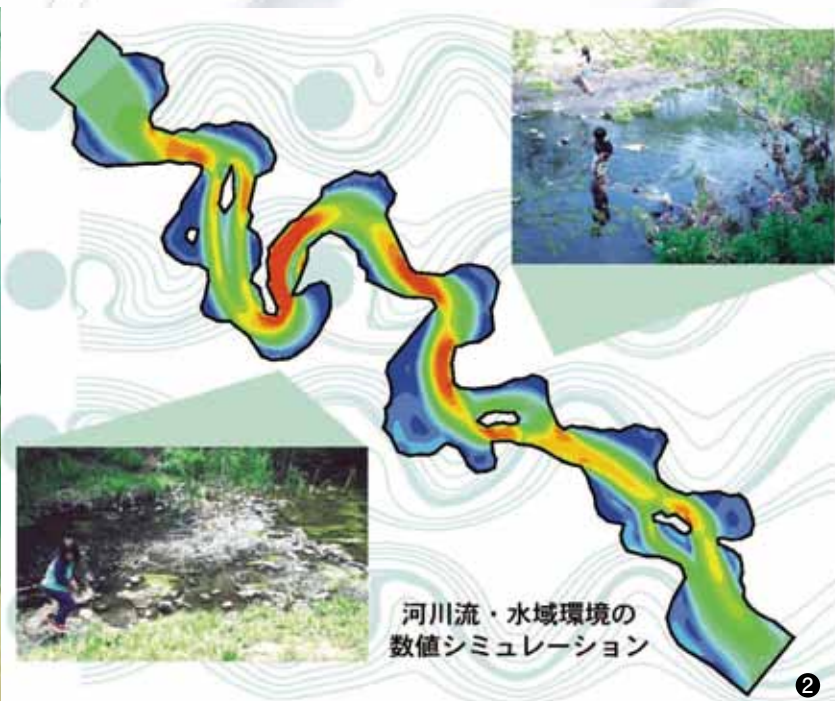
礎に基づくより広い視点からの総合的課題解決能力の学修を目指す。

### 2) 自然災害のメカニズム解明と減災技術の高度化

安全・安心な社会の基礎としての社会基盤の創出・保全のためには、減災は重要である。自然災害の原因は、地殻変動と気候変動であり、地震災害、火山災害、風水災害、地盤災害などに分類される。近年は、温暖化など世界的に活発化する気候変動により災害がより広域化、巨大化、複合化する傾向にある。計測技術や災害予測法の高度化、広域ハザードマップ作成などの災害情報マネジメントや経済的で有効な災害対策技術の構築が求められている。減災技術構築のため、計算科学や計測・実験科学などの先端



①



河川流・水域環境の  
数値シミュレーション

②

- ① 風洞実験施設
- ② 河川流・水域環境の数値シミュレーション
- ③ 杭基礎構造物の地震時挙動に関する3次元解析
- ④ カナダ国 Mallik において行われた、メタンハイドレートの生産テストの風景

講座名	分野名	教授	准教授・講師	助教
応用力学		田村 武		
構造工学	構造材料学	宮川 豊章	山本 貴士 安 琳	高谷 哲
	構造力学	杉浦 邦征	宇都宮 智昭	橋本 国太郎
	橋梁工学	白土 博通	八木 知己	服部 洋
	構造ダイナミクス	小池 武	五十嵐 晃	古川 愛子
	国際環境基盤マネジメント	金 哲佑		
水工学	水理環境ダイナミクス	禰津 家久	山上 路生	野口 和則
	水文・水資源学	椎葉 充晴	立川 康人 金 善玟	萬 和明
地盤力学		岡 二三生	木元 小百合 TAMRAKAR Surendra Bahadur	肥後 陽介
空間情報学		田村 正行	須崎 純一	牧 雅康 大古 慶
都市基盤設計学	景観設計学	川崎 雅史	久保田 善明	山口 敬太
	沿岸都市設計学	後藤 仁志	原田 英治 KHAYYER Abbas	五十里 洋行
資源工学	応用地球物理学	三ヶ田 均	後藤 忠徳	武川 順一
	地殻開発工学	石田 毅	村田 澄彦	深堀 大介
	計測評価工学	朝倉 俊弘	塚田 和彦	西藤 潤
社会基盤安全工学 (JR西日本)		小山 幸則	大島 義信	川西 智浩

的工学基礎に基づいて技術的イノベーションを実現することを目標とする。

### 3) 社会インフラの統合的アーキテクチャとマネジメント技術の高度化

インフラ施設の安全性と機能性を確保しつつ、期待されるサービス水準を着実に維持するとともに、成熟社会における社会インフラの創造と更新に際して、環境との調和や人間工学に立脚した快適性の追求を目指し、既存の社会基盤施設の維持管理に係る点検・モニタリング、診断、補修・補強・更新、長寿命化などに関する革新的技術、社会基盤施設の維持管理情報をデータベース化するGIS技術、維持管理コストの平準化と低減化を実現するマネジメント技術、景観・環境と都市防災を考慮した都市基盤施

設と公共空間の計画設計技術などの開発により、先進国と急速に発展するアジア諸国を含めた社会インフラのマネジメント技術の高度化への貢献を目指す。

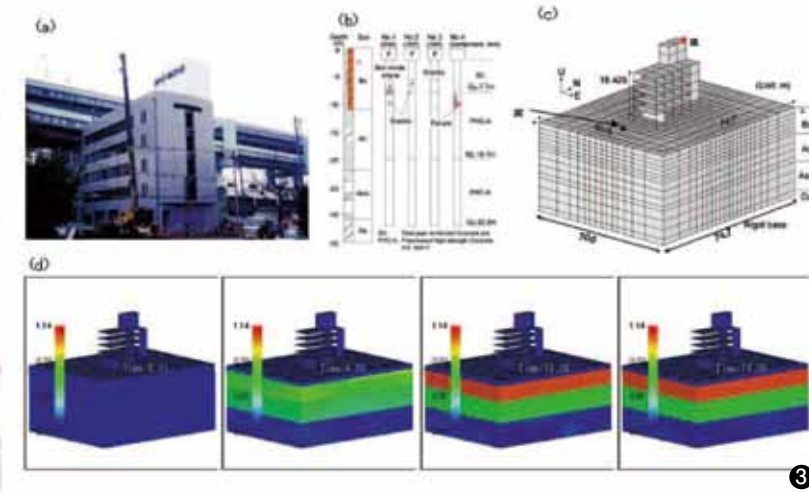
### 4) 発展的持続性社会における地殻・資源エネルギーの利用

地殻内鉱物資源・エネルギーの探査・開発・生産や地下空間の安定的且つ持続的な有効利用、および地圏を利用する人工建造物の建設・維持・管理には、地殻に関する情報を整理し、地圏と人類社会の関係の理論的学理の構築および環境にやさしい実際論的な利用技術の開発が求められている。地下可視化技術の高度化、衛星技術などのリモートセンシング技術、GIS等の地理情報システムとの統合的解析技術や安全安心なロボティッ

クス技術の導入など、急速な都市化の進むアジア諸国への技術移転を視野に、社会全体の要請に応える貢献を目指す。

### 5) 低炭素社会実現に向けた諸問題解決への寄与

資源・エネルギーのリサイクルや効率的な利用に加え、既に大量に排出された炭酸ガスや原子力発電所廃棄物などの環境破壊物質の地中貯留、地層処分技術の確立など、低炭素社会の実現に向けた諸問題の解決に寄与するために、自然あるいは人工的要因による地殻内物理状態変化や流体循環などの現象解明を行い、その結果に基づいて地内部環境に配慮した地殻利用技術、物理状態変化を把握する技術の進歩に対する貢献を目指す。



講座名	分野名	教授	准教授・講師	助教
防災工学 (協力:防災研究所)	砂防工学	藤田 正治	堤 大三・竹林 洋史	宮田 秀介
	防災水工学	中川 一	川池 健司	馬場 康之 張 浩
	地盤防災工学	井合 進	三村 衛	飛田 哲男
	水文気象工学	中北 英一	城戸 由能	
	海岸防災工学	間瀬 肇	森 信人	安田 誠宏
	防災技術政策	寶 馨	山敷 庸亮	
計算工学 (協力:学術情報メディアセンター)	水際地盤学	平石 哲也	武藤 裕則	東 良慶
		牛島 省		吉川 仁
環境創造工学 (協力:産官学連携本部)		木村 亮		

# 都市社会工学専攻

## Department of Urban Management

都市社会工学とは、持続可能であり安全かつ国際競争力を備えた、人間活動の基盤となる都市システムの創造を目的とする総合工学です。

人類は豊かな都市文明を構築してきましたが、一方で、現代都市はグローバルな競争、大規模な災害リスク、未成熟な生活環境、有限なエネルギー資源などの重大な課題を抱えています。現代社会の都市問題を解決するためには、社会・経済活動と自然力や自然環境が織りなす複雑な相互関係を常に射程におきながら、高度情報通信技術をうまく活用した持続可能な都市システムを構築していくことが重要であり、成熟化社会における新たなアメニティの形成、自然的、社会的、経済的リスクのマネジメントなど挑戦すべき

課題は非常にたくさんあります。

都市社会工学専攻は、高度で豊かな生活の質を保障しうる都市システムの実現をめざして、高度情報通信技術、社会基盤技術、エネルギー基盤技術の融合を図るために、都市工学・交通工学・ロジスティクス工学などの都市活動を分析する技術や、都市計画・交通計画などの計画技術、安全で持続可能な都市システムを実現するためのライフライン、地盤、河川などに関わる都市基盤を高度化する技術、都市ガバナンスおよび都市基盤マネジメントという概念の下での新たな都市エネルギー資源論を構築するための技術、さらには持続可能性評価を含めた都市システムの総合的なマネジメントをおこなうための方法論や技術の確立をめざしています。

具体的には、1) 都市情報通信技術の革新と社会基盤の高度化、2) 高度情報社会における災害リスクのマネジメント、3) 都市基盤のマネジメント技術の発展、4) 国際化時代に対応した社会基盤整備、5) 有限エネルギー資源論に立脚した都市構造の確立に取り組みます。

これらの理念を実現するために、高度情報社会における先端的都市システムの構築に積極的に貢献し、社会をリードしていくことのできる人材を育成することを教育の目標としています。すなわち、自らの進むべき方向性について明確な展望をもち、かつ、実社会の多様な局面に対応することのできる専門知識とそれに裏打ちされた柔軟性、創造性、勇気を持ち、これらをベースとして実社



- ① 大規模振動台によるコンクリート構造物の損傷評価実験
- ② 江戸時代からの親水空間
- ③ 平成20年度都市社会工学専攻優秀修士論文賞受賞者
- ④ 路面電車と歩行者が共存する空間（トランジットモール）
- ⑤ 都市社会工学セミナーの実験演習風景

講座名	分野名	教授	准教授・講師	助教
構造物マネジメント工学		河野 広隆	服部 篤史	石川 敏之
地震ライフライン工学		清野 純史	DURAN C.Freddy R.	小野 祐輔
河川流域マネジメント工学		細田 尚	岸田 潔 PUAY How Tion	音田 慎一郎
ジオマネジメント工学	土木施工システム工学	大津 宏康	塩谷 智基 FLORES Giancarlo	稲積 真哉
	ジオフロントシステム工学		西山 哲	小山 倫史
	環境資源システム工学	松岡 俊文	山田 泰広	辻 健
都市社会計画学	国際都市開発		金 広文 QURESHI Ali Gul	
	計画マネジメント論	小林 潔司	松島 格也	大西 正光 吉田 護
	都市地域計画	中川 大	松中 亮治 尹 鍾進	大庭 哲治 松原 光也
ロジスティクスシステム工学		谷口 栄一	山田 忠史	安東 直紀
交通マネジメント工学	交通情報工学		宇野 伸宏 嶋本 寛	塩見 康博
	交通行動システム	藤井 聡	SCHMÖCKER Jan-Dirk	
地殻環境工学			水戸 義忠	
エネルギー資源開発工学 (JAPEX)		松岡 俊文 (兼任)	上田 晃	LIANG Yunfeng
先進交通ロジスティクス工学 (阪神高速道路)		横田 孝義		玉川 大



会においてリーダーシップを発揮することのできる自立した人材の輩出を目指しています。このため、これまで以上にクロスオーバーな学際領域の研究を促進することが重要と考え、社会人、留学生、他研究科・専攻、他学科、他大学学生など多様な学生の受け入れを積極的におこなっています。また、構造物マネジメント工学、地震ライフライン工学、河川流域マネジメント工学、ジオマネジメント工学、都市社会計画学、ロジスティクスシステム工学、交通マネジメント工学、地殻環境工学、都市国土管理工学、社会基盤親和技術論などの講座から成る広範囲にわたる内容の講義科目を確実に提供するとともに、プロジェクト調査や企業研修を自主的に企画・実施し、結果をまとめて発表するセ

ミナー形式の科目を通して、学生の自主性・積極性・レポート作成能力・プレゼンテーション能力・ディスカッション能力の向上を図っています。



講座名	分野名	教授	准教授	助教
都市国土管理工学 (協力：防災研究所)	耐震基礎	澤田 純男	高橋 良和	後藤 浩之
	地域水環境システム	小尻 利治	田中 賢治	浜口 俊雄
	水文循環工学	堀 智晴		野原 大督
	災害リスクマネジメント	岡田 憲夫	横松 宗太	
	自然・社会環境防災計画学	角 哲也	竹門 康弘	
	都市耐水	戸田 圭一	米山 望	

講座 (地球環境学)	分野名	教授	准教授	助教
社会基盤親和技術論		勝見 武	乾 徹	

# 都市環境工学専攻

## Department of Environmental Engineering

科学の進歩は、人類に物質面での繁栄をもたらしてきました。しかしながら、この繁栄にともなって様々な環境上の問題が引き起こされ、人の健康や生命が脅かされていることも事実です。さらに、気候変動等の地球環境問題に代表されるように、いまや人類の発展は地球規模での限界に直面しています。地球上には、高齢化・価値観の多様化に困惑する社会が存在する一方で、人口爆発や人間安全保障の未充足に苦しむ社会が依然存在します。こうした地域固有の環境問題を克服し、21世紀の社会の新たなあり方を統合的に探求することが今求められています。

都市環境工学専攻は、上記の要請に応えるべく、学内の関連部局・専攻とも連携し、個別の生活空間から都市・地域、さらに地球規模に至る幅広い環境場を対象として、以下の目的を念頭に教育・研究を推進します。

### 1) 顕在化 / 潜在化する地域環境問題の解決

人類の活動は、大気汚染、水質汚濁、土壌汚染、騒音、廃棄物問題、生態系の破壊等、都市・自然環境の劣化を招いており、長期的・広域的な視野に立って、これらの直面する問題の解決に当たる必要があ

ります。都市環境工学専攻では、環境問題の発生を把握・予測し、それらを実際に解決する技術を開発し、最も効果的かつ社会に受容される総合的な解決策を立案します。

### 2) 健康を支援する環境の確保

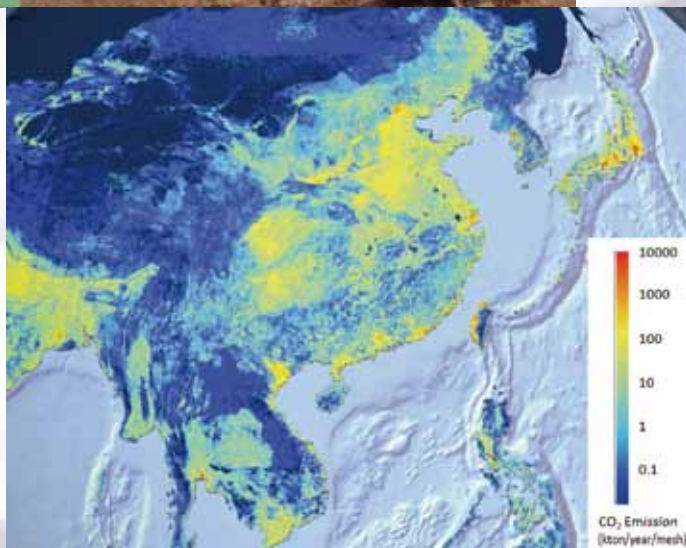
現代生活を支える莫大な数の化学物質や非意図的に生産された物質などの中には、人々の健康に悪影響を及ぼす様々な化学的・物理学的・生物学的有害因子が存在しています。これらの環境中での挙動や、人への影響機序の解明を行うとともに、健康に及ぼすリスクやリスクの集中を評価・管理する手

①



- ① 水処理・水環境に関する研究：下水高度処理技術の開発 - 生物膜ろ過反応器のパイロットプラント(左)と海外におけるフィールド調査(タイ東方区部)(右)
- ② 地球環境に関する研究：アジア地域でのエネルギー使用によるCO<sub>2</sub>排出量
- ③ 廃棄物・大気汚染に関する研究：大型放射光施設(SPring-8)の放射光蓄積リング棟内(上)と、ビーム照射ハッチ内の制御反応槽(左下)と蛍光X線検出器(右下)。廃棄物焼却炉におけるダイオキシン生成過程での金属の役割や、ディーゼル排気中の微量金属が検出できる。
- ④ 環境リスクに関する研究：桂キャンパス培養室(右下)と、ウェルプレートを用いた組織切片の染色(左下)。厚さ数十μmの切片は、一般染色(右上)や免疫染色後(左上)に顕微鏡観察される。培養細胞や実験動物に対して、環境中の有害化学物質や粒子状物質を投与・曝露し、毒性試験やタンパク質等のバイオマーカーの定量を行う。

②



法を開発する。これらの成果を総合化し、健康リスク因子からの被害を未然に防止しつつ、人々が健康に安心して生活できる環境の確保を行います。

### 3) 持続可能な地球環境・地域環境の創成

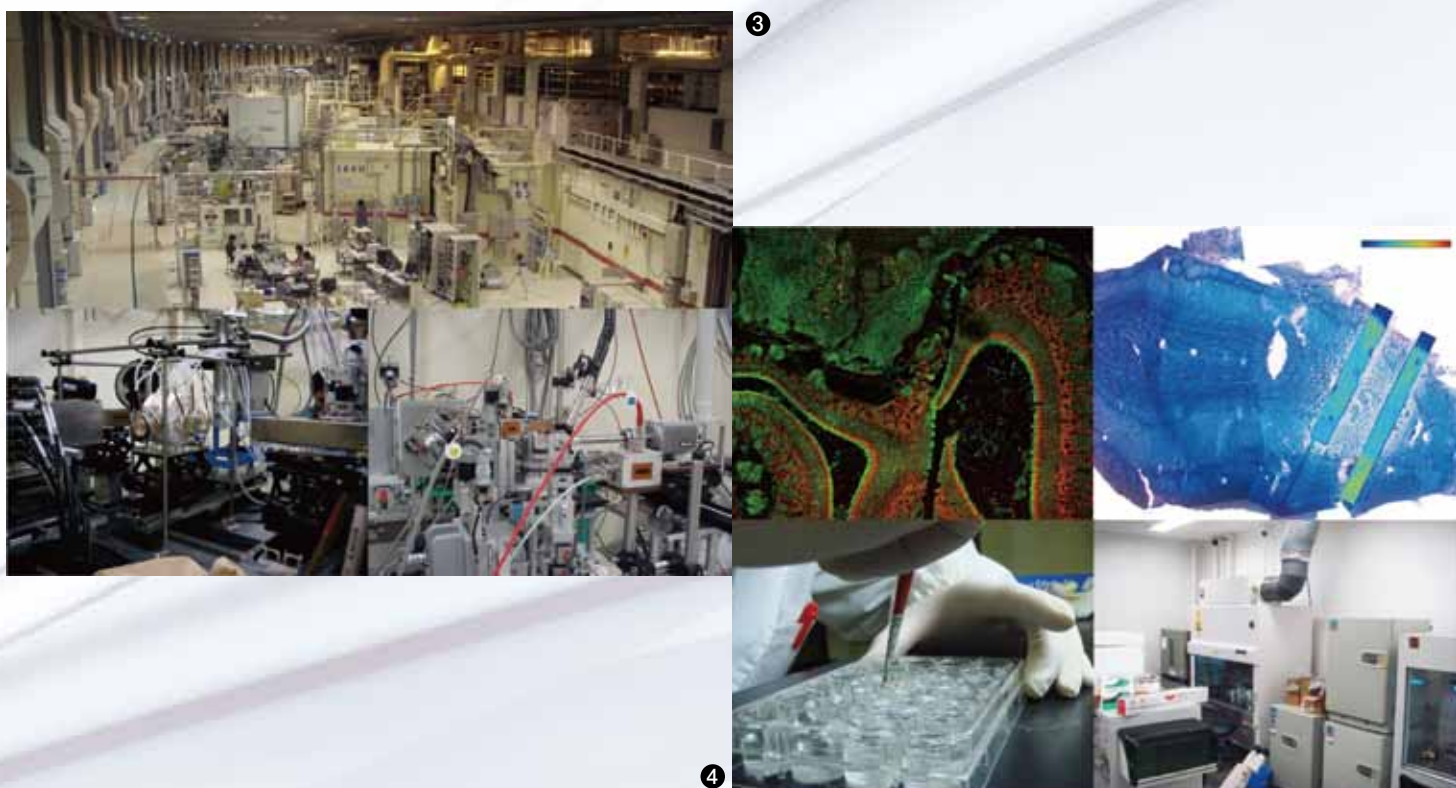
人間・環境系は物質的循環を伴いながら一つのシステムを構成しています。都市環境工学専攻では、長期的及び広域的視点から循環型・自然共生型・市民参加型社会の創造に寄与する技術とシステムを構築します。環境に関わる地球規模での諸問題につ

いても、その計測手法の開発、それらの間に存在するメカニズムのモデル化や、定量的な検討、将来推計などを行うとともに、対策立案や政策提言等を通じて生態系も含めた人間生存の場を総合的にデザインします。

### 4) 新しい環境科学の構築

環境問題は、既存科学の限界が、我々の日常生活に露呈した結果ともいえます。すなわち、環境問題の解決には、既存科学や工学の枠組みを越えた新しい学問体系が必要です。都市環境工学専攻では、工学技術を基盤に、アジア地域を中心とした国際的

研究フィールドを含む、環境問題の現場を重視した教育・研究活動と、医学・社会学・経済学から倫理学に及ぶ学際的なアプローチを通じて、人々の健康と安心を保証しつつ持続可能社会を支える総合的な学問体系の構築を目指します。



講座	分野名	教授	准教授	講師	助教
環境デザイン工学			高岡 昌輝		大下 和徹 水野 忠雄
環境衛生学			松井 利仁		村山 留美子
環境システム工学	水環境工学	津野 洋	西村 文武 八十島 誠		日高 平 高 興保
	環境リスク工学	米田 稔		松井 康人	中山 亜紀
	大気・熱環境工学	松岡 譲	倉田 学児		河瀬 玲奈
	都市衛生工学	伊藤 禎彦	越後 信哉 平山 修久		大河内 由美子
物質環境工学	環境質管理	清水 芳久	松田 知成		中田 典秀
	環境質予見	田中 宏明		山下 尚之	浅利 美鈴
	環境保全工学	酒井 伸一	平井 康宏		窪田 卓見 太田 朋子
	放射能環境動態	馬原 保典	藤川 陽子		今中 哲二 小出 裕章 福谷 哲
	放射性廃棄物管理	小山 昭夫			
講座 (地球環境学堂)	分野名	教授	准教授	講師	助教
環境調和型産業論		藤井 滋穂	田中 周平		内海 秀樹 原田 英典 Nguyen Pham Hong Lien

# 建築学専攻

## Department of Architecture and Architectural Engineering

生活環境が急激に変化するなかで、現代社会が求める高度で複雑な機能を担う建築空間を実現するためには、基礎的分野の研究、先端的分野の研究を推進するとともに、建築を自然環境と生活環境のなかで総合的に捉え直し、専門分野の研究を相互に有機的に結合し、総合化を進める研究が不可欠である。それゆえ本専攻では、それぞれの分野での基礎的および先端的な研究・教育を行うとともに、総合化のための理論的研究・教育と創造的研究・教育、さらにその実践システムの研究・教育を行う。

### 建築保全再生学

地震を始めとする災害に対して安全性や持続性を高めるように建築物・地域を保全再生するための理論や技術について、自然科学的・社会科学的な観点から教育・研究を行う。

### 人間生活環境学

人間の感覚・認知・行動の理解を出発点とし、人間から環境への新しいアプローチによって快適性、安全性、健康性などの観点から人間にとって真に望ましい生活空間環境のあり方を追求する。

### 建築史学

人間の活動を支える建築・都市、生活空間の歴史と文化を総合的に理解することを目指し、歴史学的立場から日本と世界における都市・建築・庭園・自然と人と社会との相互作用、空間構成の理念と方法、建築思潮を研究している。

### 建築構法学

コンクリート及び鋼等の材料力学、これら材料を用いた各種構造の力学理論と設計理論及び最新の構法技術を用いて安全で安心な建築空間を構築するための教育・研究を行う。

### 建築環境計画学・建築環境計画学

多様化した建築群と住空間の生活主体やユーザーの心理構造や利用構造を解析・評価し、基本構想から空間計画、設計にいたるプロセス、最適計画、計画課程の理論と方法を研究している。

### 建築環境計画学・生活空間環境制御学

熱・換気・湿気を中心として、アメニティのある生活環境を創出するための総合的な環境調整と環境制御の基礎科学を展開する。さらに要求される環境条件を実現するための諸設備の理論と計画法を追及する。

### 建築設計学・建築設計学

建築設計における思考の諸相を分析することによって、具体的な創作技術としての設計方法論、建築意匠論、及び建築とその存在の意味を追求する建築論を研究している。

### 建築設計学・生活空間設計学

建築から地域にいたる生活空間の構造と意味についての実証的・理論的に解明。あわせて人間の住まう建築空間の制作と実践についての総合的な教育・研究を行う。

### 建築構造学

安全で合理的な建築構造の実現をめざし、構造

物の挙動解析法、崩壊挙動や臨界現象の解明、限界状態に基づく耐震設計法、最適設計法、システム同定などの研究を行う。

### 建築生産工学・建築社会システム学

建築や都市の優れた設計やマネジメントを支援するためのシステム工学等を利用した方法論を構築する。また、建築生産ならびにプロジェクトマネジメントに関して、システム構築と具体的方法論を研究する。さらに、グローバル化に伴う産業構造、職能性、調達方式等建築生産のあり方を研究する。

### 建築生産工学・空間構造開発工学

多様化・高性能化要求を満足する新たな構造空間を開発するために、鋼・コンクリート等の材料特性を最大限に発揮させる構造構成法や接合方法に関して、解析・設計理論の教育・研究を行う。

### 都市空間工学

都市環境と建築環境を融合させ、都市空間の持続可能な環境と安全をデザインする方法論を研究し、超々高層ビルや大規模地下空間等の巨大化・複合化した空間や都市街区の温熱・光環境の創造のための応用研究を行う。

### 居住空間学

都市環境におけるより質の高い居住空間の実現を目指し、理論的研究、フィールドワーク、実験的プロジェクトの開発・実施・評価を通じて、持続可能な社会に適合した居住空間のあり方を研究する。

### 環境材料学

材料・構法創生学と破壊力学の応用に基づき、



- ① 京都・嵯峨鳥居本の街並み景観の連続立面図
- ② 鉄筋コンクリート造立体壁の載荷実験
- ③ 大規模木造建築のデザイン研究
- ④ 伝統構法による木造建築の耐震性能実験
- ⑤ 実験集合住宅 NEXT21

講座	分野名	教授	准教授	講師	助教
建築保全再生学		林 康裕			多機山 法子
人間生活環境学			石田 泰一郎		
建築史学			山岸 常人		岸 泰子
建築構法学		西山 峰広	河野 進		坂下 雅信
建築環境計画学	建築環境計画学	門内 輝行	吉田 哲		守山 基樹
	生活空間環境制御学	鉾井 修一			小椋 大輔
建築設計学	建築設計学	高松 伸	竹山 聖		高取 愛子
	生活空間設計学	岸 和郎	田路 貴浩		朽木 順綱
建築構造学		上谷 宏二	荒木 慶一	李 有震	山川 誠
建築生産工学	建築社会システム工学	加藤 直樹	古阪 秀三		瀧澤 重志
	空間構造開発工学	吹田 啓一郎			
都市空間工学		原田 和典	上谷 芳昭		
居住空間学		高田 光雄	神吉 紀世子		安枝 英俊
環境材料学		金子 佳生			佐藤 裕一
建築構成学	音環境学	高橋 大武	伊勢 史郎		堀之内 吉成
	地盤環境工学	竹脇 出	辻 聖晃		吉富 信太
建築防災工学 (協力講座：防災研究所)	建築耐震工学	中島 正愛			
	建築安全制御学	川瀬 博	松島 信一		
	風環境工学	河井 宏允	丸山 敬		荒木 時彦
空間安全工学 (協力講座：防災研究所)	地震環境工学	田中 仁史	田村 修次		
	都市防災計画学	田中 喙義			
建築創造工学 (協力講座：産官学連携本部)			金多 隆		
人間環境設計論 (協力講座：地球環境学堂)		小林 正美	小林 広英		落合 知帆

セメント系材料と高性能合金の構成則、構造接合の開発と環境共生への適用、損傷制御機構とスマート構造に関する研究・教育を行う。

### 環境構成学・音環境学

居住空間における音環境のあり方、最良の状態への制御、そのための新しい音響材料の開発、音場再現・音場制御技術の開発、およびコミュニケーションのための音環境設計などについて教育・研究を行う。

### 環境構成学・地盤環境工学

建物の耐震安全性向上をめざし、制振・免震構造の基本原理の解明と実際の建物への応用、最適・逆問題型設計法の開発、構造ヘルスマニタリング技術の開発、地盤震動を考慮した設計用地震動の構築などの教育・研究を行う。

### 建築防災工学（協力）・建築耐震工学

地震を受ける建築構造物の応答・損傷・崩接特性を解明するとともに、機能性・安全性に優れた建築構造物創成のための耐震設計法の高度化や、既存建築ストックの再生技術に関する教育・研究を行う。

### 建築防災工学（協力）・建築安全制御学

建築空間の安全性・機能性を高めるために、制震構造システムと構造ヘルスマニタリングの開発、木造建築物の耐震設計・補強法、都市域の地震被害推定に関する研究を行う。

### 建築防災工学（協力）・風環境工学

構造物の強風による被害低減のため、構造物に加わる力や周辺気流を、観測、実験、数値計算などにより解析し、合理的な耐風設計法の創造のための研究を行う。

### 空間安全工学（協力）・地震環境工学

地盤と建築構造物の地震時達成挙動を解明するとともに、損傷制御を目的とした耐震設計法の開発、木質プレストレス工法の開発、液状化地盤における基礎の耐震設計の高度化などに関する教育・研究を行う。

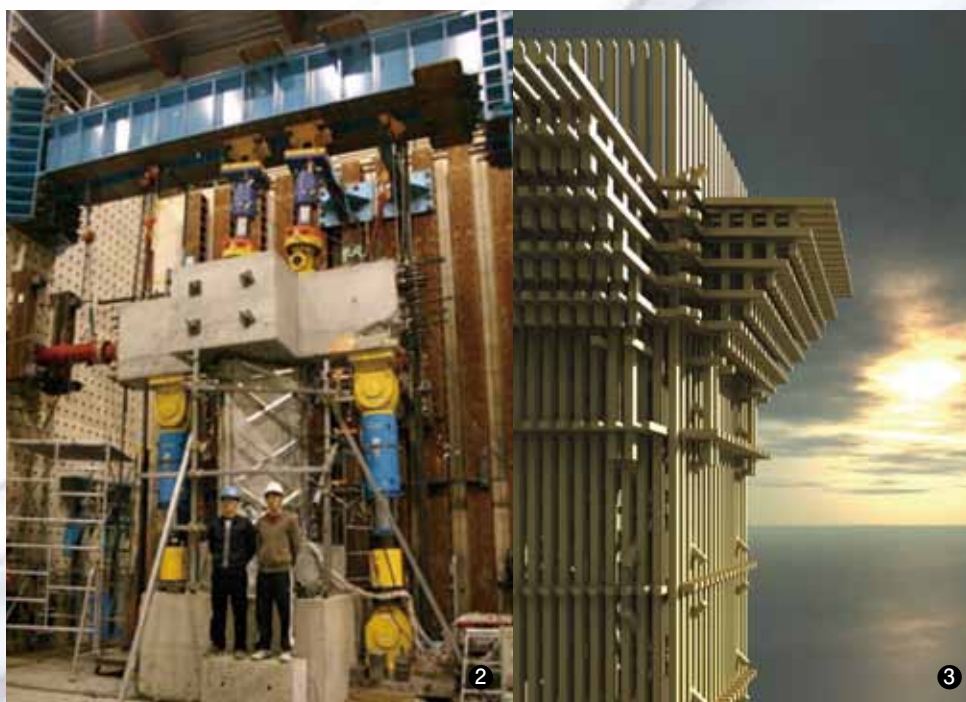
### 空間安全工学（協力）・都市防災計画学

都市大地震時の火災延焼、住民避難、文化財建築・伝統的まちなみの保護、地下空間火災など、都市空間における災害リスク評価技術および安全性向上のための計画手法に関わる研究を行う。

### 建築創造工学（協力）

国際的な産学官連携のもとで優れた都市・建築の計画、環境・設備の設計、建築工法・技術の開発、生産システムの革新などを統合する新たな価値観や学問領域を展開する。

### 人間環境設計論（協力）



桂キャンパス建築棟

# 機械理工学専攻

Department of Mechanical Engineering and Science

## 機械工学群

機械工学は、「ものづくり」の総合の学であり、あらゆる産業分野の発展に貢献してきた基礎の工学です。京都大学における機械工学の歴史は、1897年の京都帝国大学の創立と同時に機械工学科が設置されて以来、100年を越えるものになりましたが、京都大学における機械工学は、つねに社会の進展を先取りした研究・教育によって、工学の中核をなしてきました。

これまで、文部科学省21世紀COEプログラム「動的機能機械システムの数理モデルと設計論」プロジェクトの拠点として、世界をリードする研究を推進し、複雑な機械システムを対象として、その様々な現象のモデル化・解析、その制御と機能設計論を

構築してきました。このような先端研究を通じた教育により、新しい研究分野を切り拓く能力と勇気を持った若手研究者を育成しています。

2005年には、新しい時代の進展に総合的に対応するため、それまでの機械工学専攻・機械物理工学専攻・精密工学専攻・航空宇宙工学専攻を統合して機械工学群を構成し、研究・教育体制の充実を図りました。

機械工学群の中核は機械理工学専攻であり、物理科学に基礎づけられた機械工学の基盤となる研究・教育を行い、将来の工学・技術の展開をめざしています。機械工学群には、社会の進展に応じて要請される新しい研究・教育をプロジェクト的に展開する拠点として、マイクロエンジニアリング専攻

攻と航空宇宙工学専攻を置き、新しい時代に機動的かつ重点的に対処する体制をとっています。

## 機械理工学専攻

その昔、人間は二本足で歩き始めて、手に道具をもちました。道具は人間の手の先(手先)のものでした。やがて、道具は進化して手先から離れ、機械とよばれるようになりました。人間が求める機能を実現するために作り出した人間の分身が機械です。いま、人間の求める機能は、10年前のものに比べても大きく変わり、それとともにその機能のための機械も変化しました。強力なパワーをもって大規模電力を生み出す発電所のタービンや時速500kmで走行するリニアモーター



- ①最先端の機械工学の成果を用いて開発が進められている磁気浮上式鉄道
- ②微小材料の変形・破壊に関するその場観察実験と原子シミュレーション
- ③多指遭遇型ハプティックデバイス
- ④大気海洋シミュレーション水槽を用いた風波気液界面を通しての熱・物質輸送実験

講座	分野名	教授	准教授	講師	助教
機械システム創成学	機械システム創成学	榎木 哲夫		中西 弘明	堀口 由貴男
生産システム工学	生産システム工学			水山 元	
機械材料力学	適応材料力学	北條 正樹	安達 泰治		井上 康博
	固体力学	宮崎 則幸	池田 徹		松本 龍介
	熱材料力学	中部 主敬			巽 和也
流体理工学	環境熱流体工学	小森 悟	黒瀬 良一		高垣 直尚
	流体物理学	木田 重雄	花崎 秀史		後藤 晋
	分子流体力学	青木 一生	高田 滋		小菅 真吾
物性工学	光工学	運尾 昌裕			四電 泰一
	材料物性学	北村 隆行		澄川 貴志	嶋田 隆広
	熱物理工学	牧野 俊郎	松本 充弘		若林 英信
機械力学	振動工学	松久 寛	宇津野 秀夫		山田 啓介
	メカトロニクス	松野 文俊	横小路 泰義		福島 宏明
	機械機能要素工学		小森 雅晴		野中 鉄也
バイオエンジニアリング	医療工学	富田 直秀			
	先端イメージング工学	井手 亜里			
粒子線物性工学	粒子線材料工学	義家 敏正	徐 虬		佐藤 紘一
	中性子物理工学	福永 俊晴	杉山 正明		伊藤 恵司
					森 一広

カーは、いまま機械でありつづけますが、マクロには動きの見えない燃料電池システムや機能性のナノ構造、人間と直接関わる医療デバイスや生体組織・細胞システム、さらには、概念としての賢いソフトシステムなど、従来の機械のイメージにはなかったものも人間の分身として期待され、機械工学はその裾野を広げつつあります。このように、「ものづくり」の“もの”は、いま、ますます多様になりつつあります。

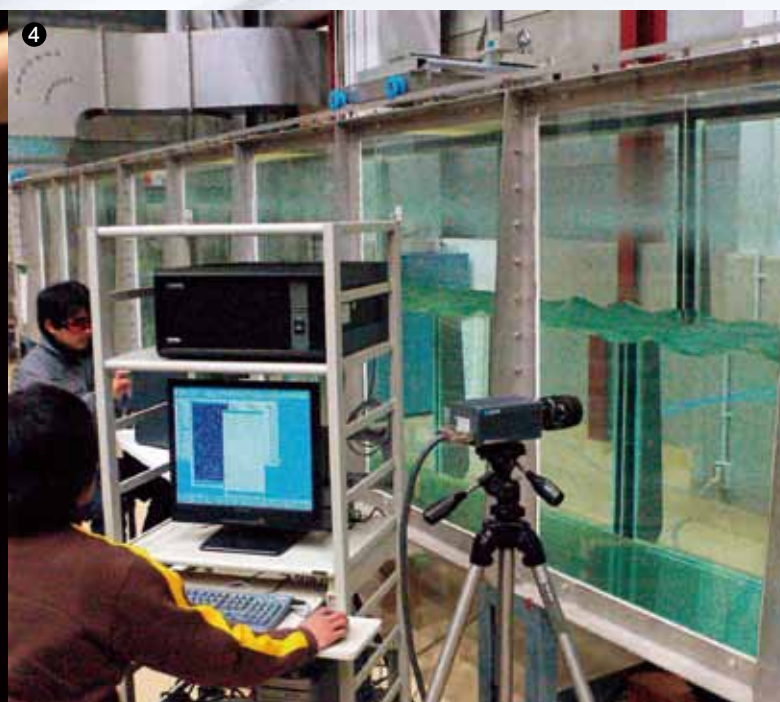
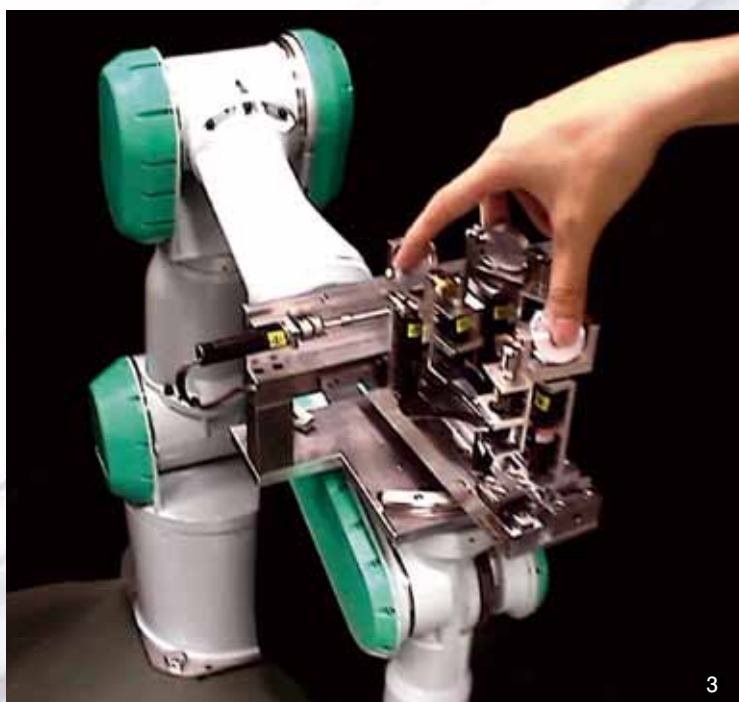
機械工学では、マイクロからマクロにわたる広範な物理系をその対象として、生産システム、エネルギー、環境、生活、生命・生体・医療などに関する人間のための技術の進展を図ります。その基礎となる学は、材料・熱・流体の力学と物性物

理、機械力学、振動工学、制御工学などであり、さらにその基礎には、機械システムとそのエレメントの設計・製造・評価・診断・制御に関する工学の考え方が求められます。

機械理工学専攻では、人間と自然との共生をめざす広い視野をもって、これらの智恵や知識を主題とする研究・教育を行ない、また、挑戦的に課題を設定しそれを克服する能力をもってリーダーとなりうる技術者・研究者を育成し、社会と産業界の期待に応えるべく努めています。

機械理工学専攻には、機械システム創成学、生産システム工学、機械材料力学、流体理工学、物性工学、機械力学、バイオエンジニアリングの7講座と、粒子線

物性工学の協力講座が設置され、その計18分野が有機的に連携して基礎的かつ先端的な研究・教育を進めています。



# マイクロエンジニアリング専攻

## Department of Micro Engineering

マイクロエンジニアリング専攻は、21世紀における人間社会・生活に大きな変革をもたらす原動力として期待されている微小な機械の研究開発能力を有する研究者・技術者を養成するための教育研究課程です。

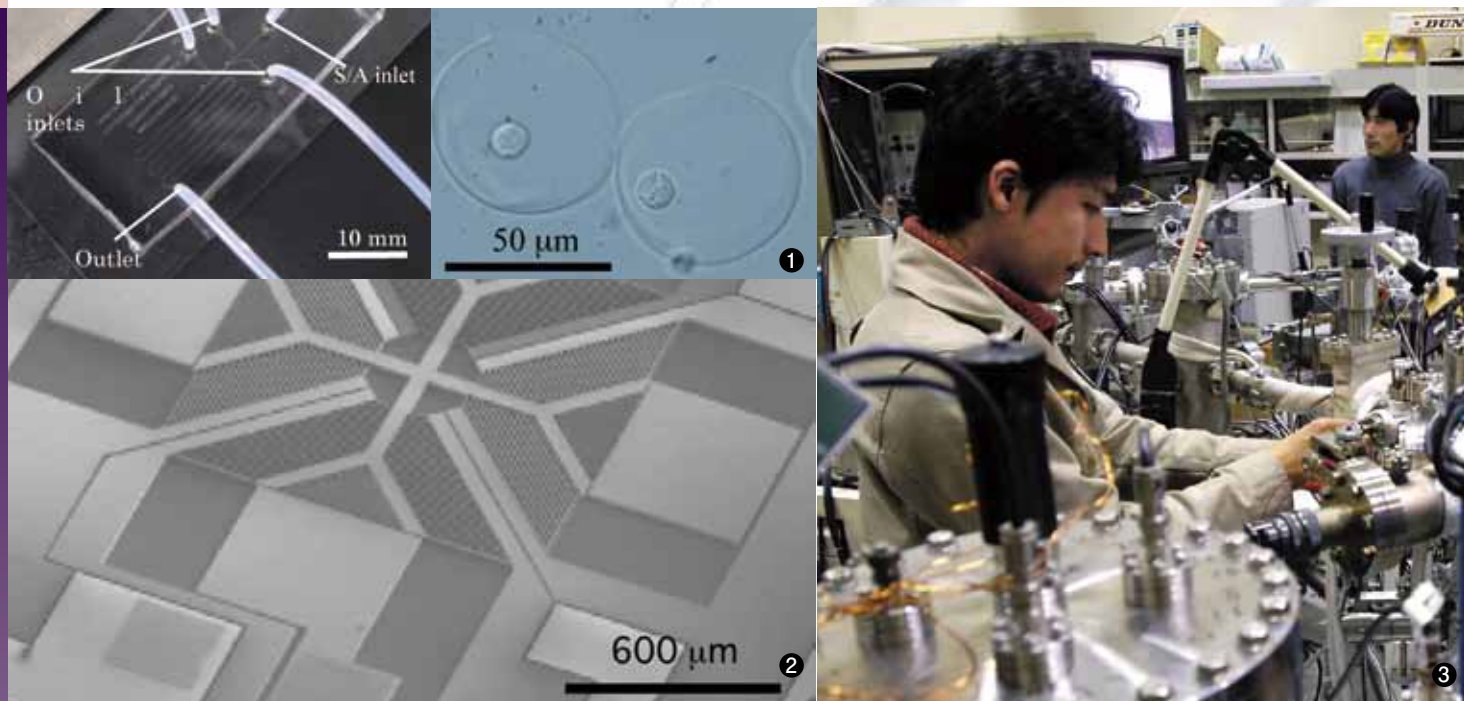
本専攻では、機械工学の基本知識をベースに、ナノメートルオーダーからマイクロメートルオーダーの微小領域特有の物理現象を解明し、ナノレベルで発現する量子効果を利用するために必要な量子工学、材料を創製し加工するための微小領域における材料工学・微細加工学、ナノ・マイクロシステムを構築し思い通りに動かすためのシステム工学・制御工学、などの学問分野を修得します。また、最も精密な微小機械の集合である生体に学び、微小機械を生体・バイオ

テクノロジー分野と融合するための生体機械工学なども修得します。ナノ・マイクロエンジニアリングに関する講義科目群の履修、および微小機械に関わる先進的なテーマに積極的に取り組む研究活動を通じて、ナノからマイクロの領域における微小機械に関する先端分野の高度な研究能力を有する研究者・技術者の養成を目指しています。

ナノ・マイクロエンジニアリングは、工学のみならずバイオエンジニアリング分野や医学・生命科学分野をはじめとする多くの分野に関連することから、近年急速に発展している異分野との融合領域と位置づけられます。本専攻では、融合領域の研究・教育の一環として、先端医工領域の教育組織である「ナノメディシン融合教育ユニット」にも深く関与

しており、本専攻の修了者は、機械工学を取り巻く異分野との融合領域における研究開発のリーダーとして幅広く活躍することが期待されています。

このような教育研究を行うために、本専攻には、構造材料強度学講座、ナノシステム創成工学講座、ナノサイエンス講座、マイクロシステム創成講座に加えて、ナノバイオメカニクス講座が協力講座として設置されています。



①細胞カプセルングルビーズのためのマイクロ流路デバイスおよび作製されたゲルビーズ（細胞を内包している）

②静電容量型3軸加速度センサ

③原子レベルの分解能で材料を分析することができる高分解能イオン散乱分光装置

講座	分野名	教授	准教授	講師	助教
構造材料強度学	構造材料強度学	琵琶 志朗			杉山 文子
ナノシステム創成工学	ナノメトリックス工学	小寺 秀俊	神野 伊策	宮野 公樹	城山 友廣 横川 隆司
	ナノ・マイクロシステム工学	田畑 修	土屋 智由		菅野 公二 義和
ナノサイエンス	ナノ物性工学	木村 健二	鈴木 基史		中嶋 薫
	量子物性学	立花 明知			瀬波 大士 市川 和秀
マイクロシステム創成	マイクロ加工システム 精密計測加工学	松原 厚	茨木 創一		河野 大輔
ナノバイオメカニクス (協力講座)	生体機械工学				都賀谷 紀宏
	シミュレーション医工学		玄 丞然		
	ナノバイオプロセス	楠見 明弘			



# 航空宇宙工学専攻

## Department of Aeronautics and Astronautics

1903年にアメリカのライト兄弟が人類初の有人動力飛行に成功してからわずか100年あまりで、航空機は一挙に1000人近い人間を乗せて15000km以上を飛行できるまでにいたりました。また宇宙においては、1961年にソ連のボストーク1号が人類初の宇宙飛行をしたのに引き続き1969年にアメリカのアポロ11号が人類初の月着陸に成功し、現在では国際宇宙ステーションの完成が2010年に計画されるとともに各種の探査衛星が太陽系の多くの惑星の貴重な情報を日々送ってきています。

人類にとって長年の夢であった大空の飛行はほぼ十分に実現した現在も、宇宙は人類にとって永遠のフロンティアです。そしてこのフロンティアを開拓するための科学技術と

して、これまで地球表面上で当然としてきた重力や圧力や温度とは全く異なる環境条件下での工学が要求されます。飛行体に必要とされるスピードや距離も飛躍的に増大し、大きさもある場合には不可避免的に巨大となり、またある場合には極小化することも要求されます。さらに信頼性がなにもまして重要です。つまり、あらゆる意味で極限の科学技術が要求されるのが航空宇宙工学です。

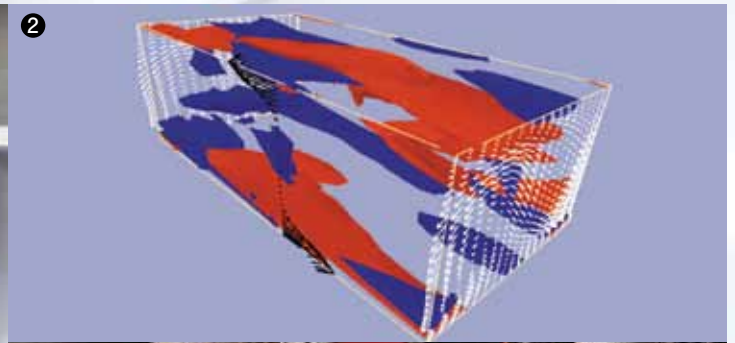
当専攻では大別して、航空宇宙機の航行にかかわる航空宇宙環境との相互作用、航空宇宙機の推進とエネルギー、航空宇宙機の材料・構造強度、航空宇宙機のシステム・制御などを研究対象としています。航空宇宙工学というフロンティアを切り開くため、当専攻では基礎的な科学と工学を最重要視

しています。いいかえると、第一の使命は単に航空宇宙に限定されず新しい可能性に向けた先端工学の扉を開くこと、第二の使命は深い知識に基づいてオリジナルなアイデアを十分に創造できる科学技術者を育てることです。

このような使命にこたえるため、教育プログラムでは工学のみならず数理物理に重点をおいています。同時に、いわゆるビッグ・サイエンス & エンジニアリングのひとつである航空宇宙工学では、国内外の組織が協力して行われる巨大なプロジェクトも多いことから、そのような場でリーダーシップや国際性を発揮できるように教育することにも力を注いでいます。



1



2



3

- ① 足歩行ロボット
- ② 平面クエット流（反対方向に動く平行平板間の流れ）における定常3次元解（永田の解）
- ③ 宇治の超空気力学実験室内

講座	分野名	教授	准教授	講師	助教
航空宇宙力学	空宇宙力学	泉田 啓			青井 伸也 横井 直人
航空宇宙基礎工学	流体力学	稲室 隆二	大和田 拓		杉元 宏
	流体数理学	永田 雅人			野口 尚史
	推進工学	斧 高一	江利口 浩二		鷹尾 祥典
航空宇宙システム工学	制御工学		幸田 武久		
	最適システム設計工学				
	熱工学	吉田 英生	岩井 裕		齋藤 元浩

# 原子核工学専攻

## Department of Nuclear Engineering

わたしたちは、素粒子、原子核、原子や分子など、量子の科学に立脚したミクロな観点から、量子ビーム、ナノテクノロジー、アトムテクノロジーなど、最先端科学を切り開く量子テクノロジーを追求するとともに、物質、エネルギー、生命、環境などへの工学的応用を展開して、循環型システムの構築をめざしています。

そして、体系的かつ立体的な教育・研究を通じて、先端的研究者や高度専門技術者などの人材を育成します。

具体的には、各講座・分野が協力しあって、次のグループで量子の科学と工学の研究・教育をしています。

量子エネルギー物理学：核反応によるエネルギーを安全で効率的に利用するため、

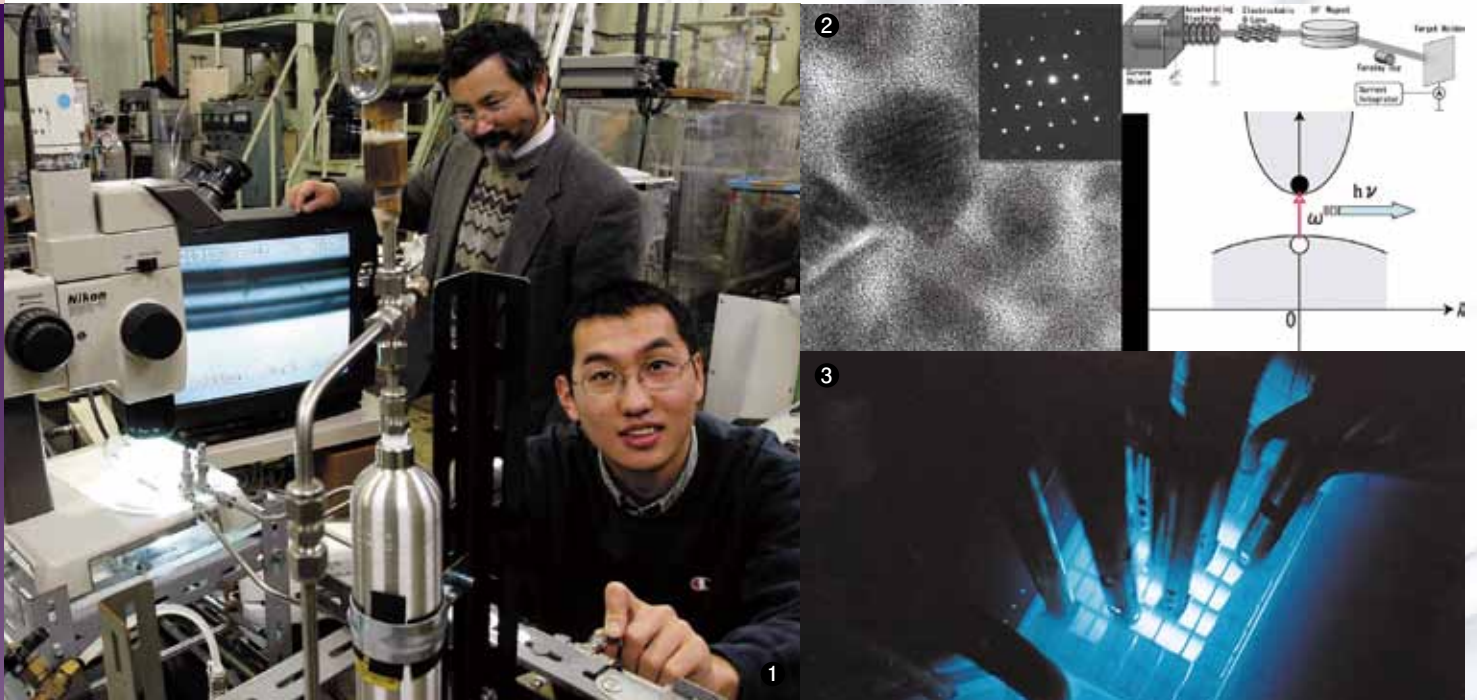
その発生と変換に関する物理と工学を研究しています。また、核融合をめざして、超高温プラズマにおける物理現象の解明と制御手法に関する研究をしています。

量子エネルギー材料工学：原子炉や核融合炉などの核エネルギーシステムの安全の確保や、放射性廃棄物の安全な処理・処分のための材料研究をしています。また、ナノテクノロジーを用いて先端的な新材料を研究・開発していきます。

量子システム工学：イオン・電子・X線・レーザーなどの高機能量子ビームを用いたナノレベルでの現象の解明、そのための検出装置の開発、医療応用などの研究をしています。そして、物質科学や生命科学の分野で基礎研究・技術開発を行います。

量子物質工学：素粒子から原子・分子まで、量子系特有の現象や性質と、それによる量子技術の研究をしています。また、物質の構造と機能の分析、新物質の探索、実際の工業応用など、大強度中性子ビームの発生と利用について考えています。

私たちは、このような研究・教育によって、人間社会のより豊かで持続ある発展に貢献します。



- ① 熱流体科学研究実験システム（複雑流体、極限流体の現象を解明する）
- ② 量子ドットの形成：粒径10ナノメートルの単結晶ドットの電子顕微鏡写真、作成装置と光の放出の模式図
- ③ チェレンコフの光：荷電粒子が物質中を高速で走るときに出る光

講座	分野名	教授	准教授	講師	助教
量子ビーム科学 量子物質工学	量子物理学	伊藤 秋男	柴田 裕実	瀬木 利夫	今井 誠
	中性子工学	山本 克治			小暮 兼三
核エネルギー工学	核材料工学	神野 郁夫	田崎 誠司		安部 豊
	核エネルギー変換工学	刀 資彰	佐々木 隆之	河原 全作	秋吉 優史
	量子制御工学	福山 淳	村上 定義		
量子理工学		高木 郁二	松尾 二郎 土田 秀次		
核システム工学 (協力：原子炉実験所)	中性子源工学	森 義治	石 禎治		川辺 秀憲
		中島 健	高橋 俊晴		堀 順一
	中性子応用光学	川端 祐司	日野 正裕		上杉 智教
	量子リサイクル工学	藤井 俊行			佐野 忠史
放射線医学物理学	森山 裕文 山名 元	藤井 俊行	日野 正裕		北口 雅暁
		古林 徹 桜井 良憲			上原 章寛
					田中 浩基

# 材料工学専攻

## Department of Materials Science and Engineering

文明は材料が創り出す！石器、青銅器、鉄器、・・・半導体、そして・・・？

現代社会において、材料はあらゆる産業の基幹をなし、その果たす役割はますます重要になりつつあります。たとえば、新エネルギー源の開発、海洋開発、宇宙開発、情報、ライフサイエンスなどいずれの最先端技術分野においても、画期的な性能を有する新材料の開発が切望されています。材料を制するものが技術を制します。

材料工学専攻は明治30年（1897年）、京都帝国大学の創立と同時に設置された採鉱冶金学科に端を發します。昭和17年に冶金学科と鉱山学科の2学科になった後、冶金学科は昭和36年に金属加工学科を新設し、平成6年には材料工学専攻とエネルギー

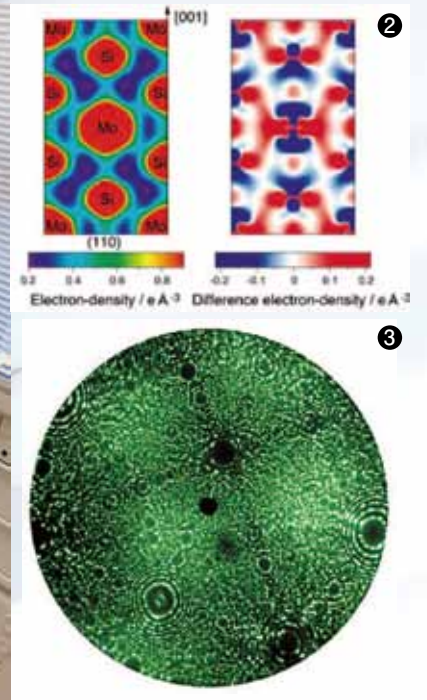
応用工学専攻に改組されました。そして今、当専攻は21世紀に発展が期待されるナノサイエンス・ナノテクノロジーを包含し、材料科学の Center of Excellence (COE) として大きく飛躍しつつあります。

材料工学専攻では、量子物理・化学、統計物理学、熱力学、物理化学、材料科学などの自然科学の体系的な知識をもとに、材料のもつ多様な性質とその構造に依存した物性発現機構を解明するとともに、新しい材料の設計開発とその製造プロセスの研究を進めています。

より具体的には、航空機、自動車や社会基盤に重要な高強度・耐熱金属材料、情報・エネルギー・宇宙開発に不可欠な半導体材料、磁性材料、超伝導材料、ファインセラミッ

クス、形状記憶合金、さらに省資源・省エネルギーなど環境調和性を重要視した新しいコンセプトの材料開発等々、先進技術の開拓のため常に新しい材料の基礎研究と開発を行っています。

次世代の画期的な新材料を生み出す無限の可能性を秘めた若い頭脳と情熱に期待しています。



- ① 走査型電子顕微鏡で結晶表面を観察する学生
- ② X線回折測定で調べたMoSi<sub>2</sub>化合物中の電子分布
- ③ 高融点Ni<sub>3</sub>Alの電界イオン顕微鏡像

講座	分野名	教授	准教授	講師	助教
材料設計工学	材料設計工学	松原 英一郎	市坪 哲		八木 俊介
	材料プロセス工学	表面処理工学	宇田 哲也		野瀬 嘉太郎
先端材料物性学	プロセス設計学	河合 潤			弓削 是貴
	マイクロ材料学	白井 泰治	伊藤 和博	井上 耕治	
	先端材料物性学	酒井 明	黒川 修		
	量子材料学	田中 功	松永 克志 大場 史康		
材料物性学	結晶物性工学	乾 晴行	田中 克志 岸田 恭輔		岡本 範彦
	構造物性学	辻 伸泰			寺田 大将
先端材料機能学	先端材料機能学	落合 庄治郎	奥田 浩司		
材料機能学	材料物理学	中村 裕之	田畑 吉計		足立 大樹 和氣 剛
	材質制御学				
	機能構築学	杉村 博之	邑瀬 邦明		一井 崇

# 電気工学専攻・電子工学専攻

Department of Electrical Engineering・Department of Electronic Science and Engineering

## はじめに

21世紀は、工業・交通・通信・農業・医療・経済などのあらゆる分野において、電気エネルギー、情報・通信、システム・制御などの技術が社会発展の鍵となります。電気工学専攻、電子工学専攻では、これらの基盤技術およびその基礎となる学術的体系の確立に取り組んでいます。

電気工学専攻、電子工学専攻の歴史は、前身である電気工学科が明治31年に創設されて以来、すでに100年を越えました。電子工学の目覚ましい発展に伴い、昭和29年に全国で初めて電子工学科が設置された後、発展的改組を経て現在に至っております。両専攻は工学研究科に所属していますが、情報学研究科、エネルギー科学研究科

との連携や、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー、生存圏研究所、高等教育研究開発推進センター、学術情報メディアセンターなどと協力しながら、電気・電子工学に関連する幅広い分野での教育・研究が行われています。また、平成14～18年度の文部科学省21世紀COE（Center of Excellence）プログラムに続いて、平成19年度からはグローバルCOEプログラム「光・電子理工学の教育研究拠点形成」プロジェクトが採択され、世界をリードする研究成果の創出を加速しています。

## 電気工学専攻

電気工学の進展はめざましく、その応用機器は、照明、家電、携帯電話、パーソナルコンピュータ、デジタルカメラなどの情報機

器、新幹線やリニアモーターカー、自動車のナビゲーションシステム、高速道路のETC、ロボットや医療用機器などあらゆる場面で利用されています。電気工学専攻は複合システム論、電磁工学、電気エネルギー工学、電気システム論の4講座と2つの協力講座からなり、電気工学に関する最先端のテーマを研究しています。複合システム論講座は、システム制御理論をベースに、生命システム、医療のための制御システム、システム最適化や生産スケジューリング問題を研究しています。電磁工学講座は電磁界の計算機解析や超伝導現象の電気工学分野への応用を研究しています。電気エネルギー工学講座は、電磁界に基づく生体の機能情報計測、電界の解析と工学応用、エネルギーの効率



- ① 超伝導体交流損失測定システム。超伝導を交流で用いたときに発生する微小な交流損失を測定する実験装置。
- ② レドックスフロー二次電池による電力貯蔵装置。「レドックス」とは、媒体であるイオンの反応である還元(Reduction)と酸化(Oxidation)から合成された造語です。
- ③ 手術中の患者の鎮静度を適切に維持する静脈麻酔制御システムの臨床応用。
- ④ 誘電体バリア放電では、条件によって、形成されたフィラメントの位置が自己組織化して固定されます。必要な場所に必要な大きさのプラズマを生成する技術にも繋がると期待されています。
- ⑤ 光子(フォトン)を自在に制御する。世界最大の光閉じこめ効果を持つフォトン結晶ナノ共振器
- ⑥ 結晶成長を原子レベルで自在に制御する。パワーエレクトロニクス半導体-炭化珪素(SiC)のステップフローエピタキシー技術。日本を代表する30の最先端研究開発プロジェクトの1つに採用された。その根幹技術で世界トップの性能。Siを置き換える今後の省エネ技術。
- ⑦ 光の強さ、波長、色を自在に制御する。窒化物半導体InGaNの表面に作られた特別な構造から複数の波長の光を放つLED。

講座	分野名	教授	准教授	講師	助教
複合システム論		土居 伸二	古谷 栄光		田中 俊二
電磁工学	電磁エネルギー工学		松尾 哲司		美船 健
超伝導工学		雨宮 尚之	中村 武恒		
電気エネルギー工学	生体機能工学 電力変換制御工学	小林 哲生 引原 隆士	濱田 昌司		笈田 武範 斎藤 啓子 佐藤 宣夫 薄 良彦
電気システム論	電気回路網学 自動制御工学 電力システム	和田 修己 萩原 朋道	久門 尚史 蛭原 義雄	山本 修	周 軍
電波工学 (協力:生存圏研究所)	宇宙電波工学 マイクロ波エネルギー伝送 電波科学シミュレーション	山川 宏 篠原 真毅 大村 善治	小嶋 浩嗣		上田 義勝 三谷 友彦
情報メディア工学 (協力講座)	情報可視化 (協力:高等教育研究 開発推進センター)	小山田 耕二			坂本 尚久
	複合メディア (協力:学術情報 メディアセンター)	中村 裕一			小泉 敬寛 近藤 一晃

的運用に関わるパワーエレクトロニクス技術などを研究しています。電気システム論講座では電気・電子・計算機回路網、計算機を用いたデジタル制御の理論と応用、新エネルギーの利用と電力システムの運用技術に関する研究などを行っています。さらに、2つの協力講座では電波工学ならびに情報メディア工学に関する研究も推進しています。

### 電子工学専攻

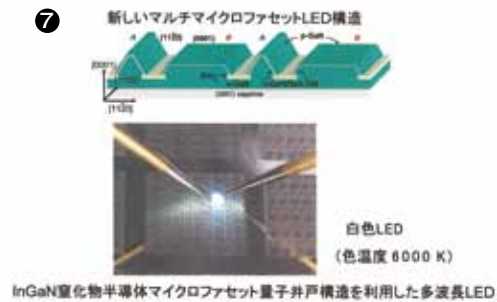
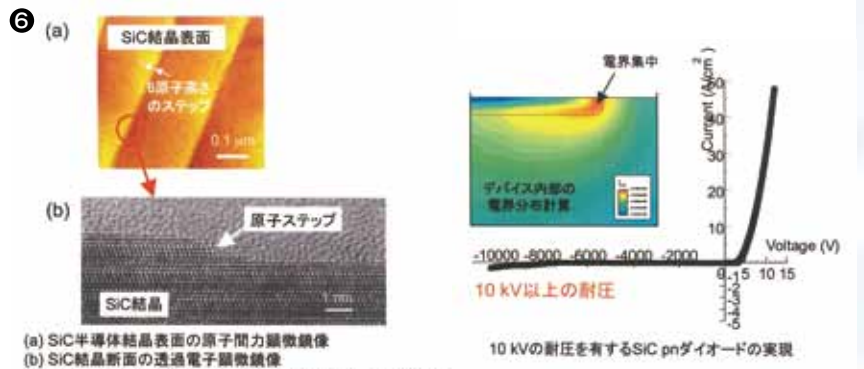
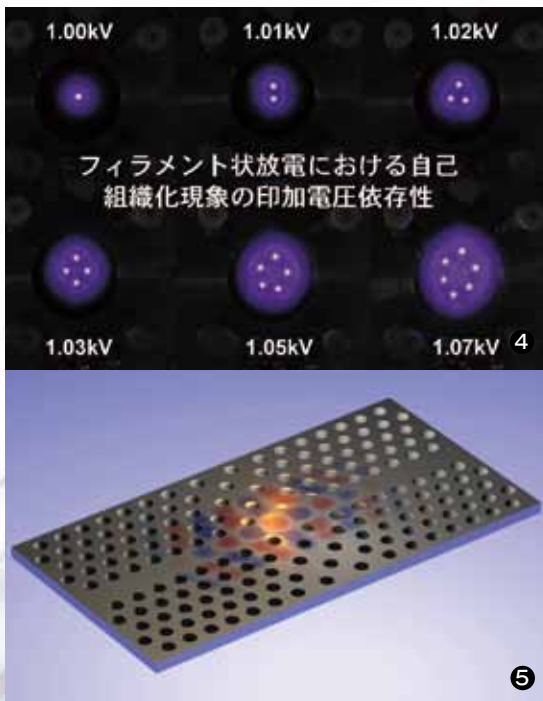
電子材料・デバイスの研究は、固体・液体・気体あるいは真空中での電子や光の量子力学的な物理現象をエレクトロニクスへ応用するという視点から始まります。電子工学専攻では、新しい電子材料の創製、新しいデバイス構造の考案と設計など、エレクトロニクスの飛躍的發展を目指した基幹ハード

ウェアの実現と、これに関連する学術的探求や理論の体系化に関する研究・教育を進めています。具体的には、異種材料の持つ物性や機能を集積し、情報の認識、伝達を可能とする機能を備えた新しい超伝導材料・デバイスの開発、電子やイオンビームの発生・輸送・制御に関する物理現象の解明と応用装置の開発、新規プラズマディスプレイや超LSI 製造用プラズマ源の研究(写真④)、新しい半導体材料の物性解明やこれを用いた大電力トランジスタの設計と作製(写真⑥)、有機分子のナノ構造・電子機能の解明や各種走査型プローブ顕微鏡の開発、半導体発光機構のナノレベルでの解明やレーザ応用(写真⑦)、光による通信・情報処理を目指したフォトニック結晶の作製とその中における

電子および光の振舞いの解明(写真⑤)、光伝搬や近接場光学、原子のレーザ冷却や量子計算に関する研究など、広範囲な分野で世界の先端を走る研究を展開しています。

### おわりに

このように、電気工学専攻、電子工学専攻では、エネルギーや環境問題、情報通信技術の発展など、人類にとって緊急の課題を解決しながら新しい学問を探求するスタッフと学生で満ち溢れています。平成15年には新しい桂キャンパスに本拠を移し、より一層、素晴らしい研究環境が整いました。この分野で革新的な研究成果を目指す情熱ある若い人を待っています。



講座	分野名	教授	准教授	講師	助教
集積機能工学		鈴木 実	掛谷 一弘		山田 義春 菅野 未知央
電子物理工学	極微真空電子工学 プラズマ物性工学		後藤 康仁 酒井 道		辻 博司
電子物性工学	半導体物性工学 電子材料物性工学	木本 恒暢 松重 和美	須田 淳 山田 啓文		西 佑介 野田 啓
量子機能工学	光材料物性工学  光量子電子工学	川上 養一  野田 進	船戸 充 岡本 晃一 浅野 卓	富士田 誠之	金田 昭男  石橋 豊次 田中 良典 小島 一信
高機能材料工学 (協力:光・電子理工学 教育研究センター)	量子電磁工学 ナノプロセス工学	北野 正雄 高岡 義寛	杉山 和彦	青木 学聡	中西 俊博 龍頭 啓充 竹内 光明
ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー	先進電子材料	藤田 静雄	中村 敏浩		

# 材料化学専攻

## Department of Material Chemistry

高度な科学技術にもとづく社会の発展にともない、多種多様な新しい物質や新しい材料の開発に対する要請がますます強くなっています。これは、まぎれもなく、これら新物質・新材料の開発を行う先端化学が、現在の人類社会の生活および産業基盤を支えていることにほかなりません。また、化学が将来において果たすべき役割に、ますます期待が膨らんでいることを物語っています。

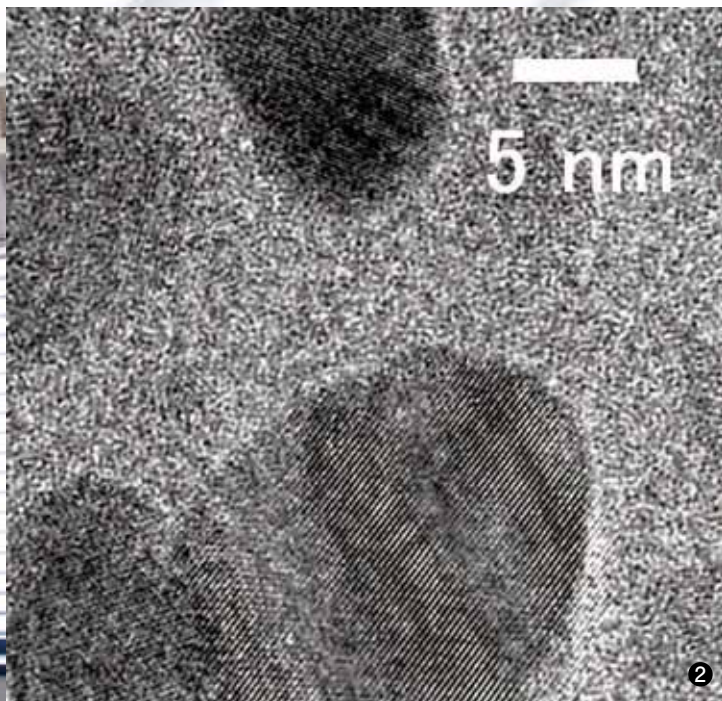
化学はいま、新物質を作る技術に加えて、物質を構成する分子の生い立ちや性質を調べ、物質特有の機能を探索する学問に変貌しつつあります。材料化学専攻では、無機材料、有機材料、高分子材料、ナノマテリアルを中心に、その構造と性質・反応性を分子レベルおよびナノレベルで解明しながら、

新しい機能や性質をもった材料を化学的に設計するとともに、その創製方法を確立することを目的として研究・教育をおこなっています。

材料化学専攻は、機能材料設計学講座（専任講座）、無機材料化学講座（基幹講座：無機構造化学分野、応用固体化学分野）、有機材料化学講座（基幹講座：有機反応化学分野、天然物有機化学分野、材料解析化学分野）、高分子材料化学講座（基幹講座：高分子機能物性分野、生体材料化学分野）、ナノマテリアル講座（基幹講座：ナノマテリアル分野）の5講座8分野で構成されています。

本専攻では、統合的科学的に基づいた新規機能材料の開発を推進するため、専攻内の

みならず専攻を越えた研究交流や研究協力体制の構築を進めています。また、外国からの学生、研究者の受け入れや海外の研究機関との連携も積極的に推進し、材料研究の国際的な研究・教育拠点となるよう、研究・教育環境の整備を図っています。



- ①有機構造化合物の構造研究に用いる400MHz核磁気共鳴装置。液体ヘリウムにより冷却された超伝導マグネット中で測定し、ごく微量の有機化合物12試料で立体化学を含めた構造が決定できる。
- ②スパッタ法で作製した酸化物磁性体薄膜の透過型電子顕微鏡（TEM）写真。アモルファス相に約10nmの大きさのナノ結晶が析出している様子が示されており、原子の並び方を直接見ることが可能である。

講座	分野名	教授	准教授	講師	助教
機能材料設計学					倉橋 拓也
無機材料化学	無機構造化学	平尾 一之	三浦 清貴		西 正之
	応用固体化学	田中 勝久	藤田 晃司		村井 俊介
有機材料化学	有機反応化学	松原 誠二郎			
	天然物有機化学		清水 正毅		中尾 佳亮
	材料解析化学	大塚 浩二		北川 文彦	末吉 健志
高分子材料化学	高分子機能物性	瀧川 敏算	浦山 健治		堀中 順一
	生体材料化学	木村 俊作			大前 仁 森田 智行
ナノマテリアル	ナノマテリアル		小山 宗孝		

# 物質エネルギー化学専攻

Department of Energy and Hydrocarbon Chemistry

化学の世界では自然科学の立場から未知の化学現象の仕組みを解明し、新しい知識を見いだすとともに、それを人々の生活や社会にとって有用な形で結晶させることを目標としています。

京都大学工学研究科 物質エネルギー化学専攻では、広い知識と視野を持った人材を育成するために、学理の基礎と原理を学び、科学的なもの見方・考え方を養うためのカリキュラム編成を行って、21世紀に活躍する意欲に満ちた学生を待っています。

前世紀における文明の飛躍的な発展は、天然資源の大量消費と環境への大きな負荷をとまうものでした。

21世紀における人類の持続的発展を可能とする環境調和型文明を構築するために

は、社会を支える科学技術は根本的な質の発展、すなわち、最少の資源と最少のエネルギーを用い、環境への負荷を最小にして、高い付加価値を有する物質と質の良いエネルギーを得てこれを貯蔵する技術と、資源の循環およびエネルギーの高効率利用をはかる技術の創成がどうしても必要です。

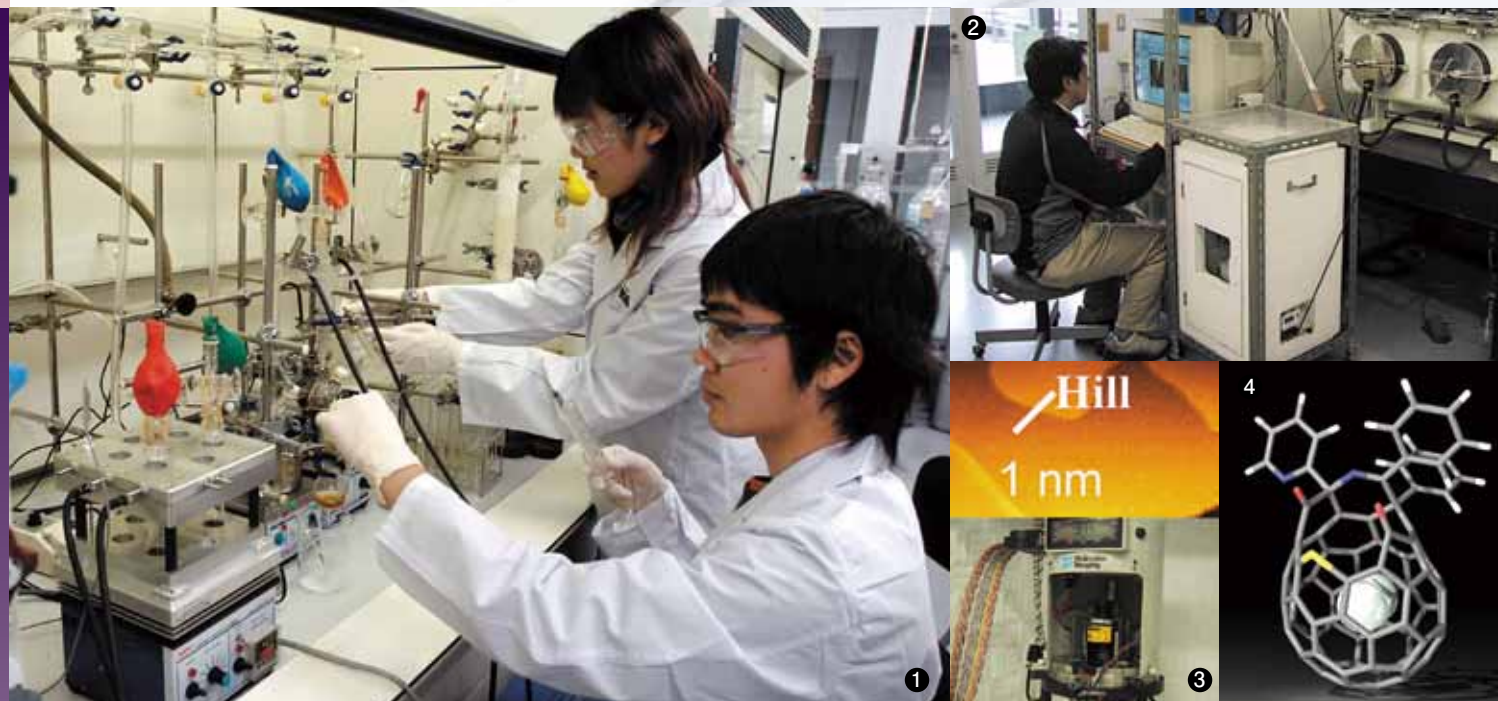
これを可能にするためには、物質とエネルギーに関する新しい先端科学技術の開拓が不可欠であり、物質変換およびエネルギー変換を支える化学は、その中心的役割を担う学術領域であることは言うまでもありません。

このような時代の要請に根本から応えるために、物質エネルギー化学専攻では、第一に、基礎化学の効果的な継承と学理の発展、第二に、それを基盤とした独創性の高い応

用化学の展開を推進することを基軸として、新しい環境調和型の物質変換およびエネルギー変換と資源の高効率循環を可能にするための研究を行っています。

具体的には以下の研究を行っています。

- エネルギー問題対応型物質変換反応の開発
- 環境問題対応型触媒反応の開発
- 新規触媒材料の創製
- エネルギー変換電極反応の開発と電極材料の創製
- 液-液・固-気および固-液界面反応の機構解明と制御
- 反応性活性種の制御による新材料の構築
- 機能性有機ケイ素化合物の創製
- 新規フラレン誘導体の創製と機能化
- トレーサーの有効利用等



- ① 新しい触媒機能を有する有機遷移金属錯体の合成、およびそれらを触媒として用いる新規環境調和型有機合成反応に関する研究を行うためのドラフト群
- ② ③ グローブボックス中で観察したナノスケールでみる電気化学エネルギー変換反応
- ④ 水素分子が内部に入った開口フラレン誘導体の分子構造

講座	分野名	教授	准教授	講師	助教
エネルギー変換化学	工業電気化学	陰山 洋			小林 洋治
基礎エネルギー化学	機能性材料化学	安部 武志	福塚 友和		宮崎 晃平
	基礎炭化水素化学	垣内 隆	西 直哉		北隅 優希
基礎物質化学	励起物質化学	大江 浩一		三木 康嗣	岡本 和純
	触媒機能化学	西本 清一	田邊 一仁		伊藤 健雄
触媒科学	触媒有機化学	井上 正志		和田 健司	細川 三郎
	触媒設計工学	辻 康之	寺尾 潤		藤原 哲晶
	合成反応設計	江口 浩一		松井 敏明	室山 広樹
物質変換科学 (協力講座)	構造有機化学	中村 正治	高谷 光		畠山 琢次
	遷移金属錯体化学	村田 靖次郎	若宮 淳志		村田 理尚
		小澤 文幸			滝田 良
同位体利用化学 (協力講座)		柴田 誠一	沖 雄一		関本 俊
			高宮 幸一		
融合物質エネルギー化学 (協力講座)	融合有機化学分子	年光 昭夫			
	フープ合成	近藤 輝幸			
先端電池基礎講座 (寄附講座)		西尾 晃治			

# 分子工学専攻

Department of Molecular Engineering

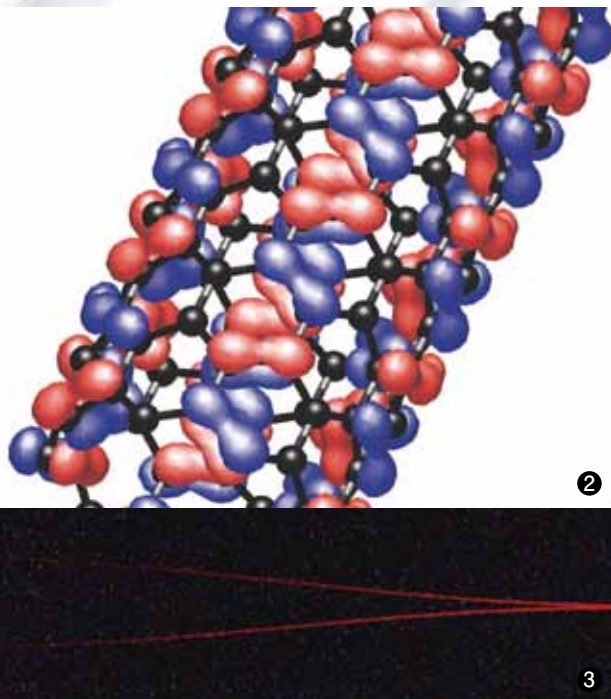
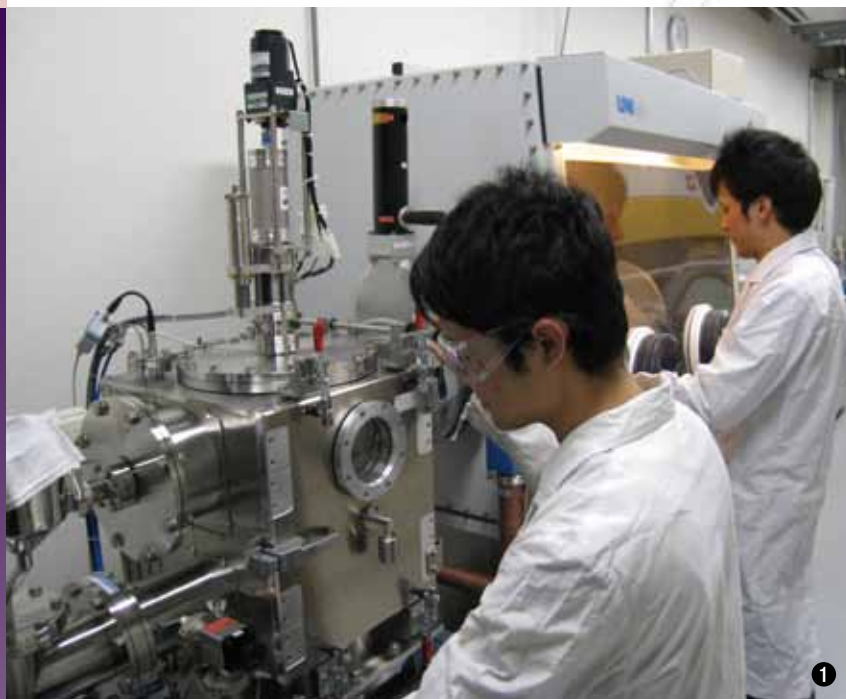
化学は物質の変換を扱う学問であるとともに、物性を電子構造・分子の配列と相互作用などとの関連で論じ、新しい機能をもつ分子や材料の設計を行う学問として、ますますその分野をひろげつつあります。分子工学は、原子・分子・高分子などがかわる微視的現象を対象とする基礎学問を支柱として、原子・分子・高分子の相互作用を理論的、実験的に解明し、その成果を分子レベルで直接工学に応用する新しい学問領域です。

分子工学専攻は、工学部石油化学科福井謙一教授のノーベル化学賞受賞（1981年）が契機となって、それに関連する物理化学系講座（石油化学教室、工業化学教室、化学研究所）が協力し、一部独立する形を

とって、1983年に京都大学大学院工学研究科における初めての独立専攻として創設されました。従来、学部教育組織に組み込まれていなかった分子工学専攻は、その後の大学院重点化に伴う工学部化学系教室の改組によって、化学系他専攻とまったく同等の組織となり、現在では学部教育にも参加するようになっています。

分子工学専攻では、分子論的視野に立つて、斬新な発想で基礎から応用への展開ができる研究者・技術者を育成することを目的として、新しい電子材料やエネルギー・情報関連材料などの開発のための基礎的研究を展開しています。その研究領域は、分子生物学的手法を用いたタンパク質の構造・機能解析、分子・分子集団や化学反応の

理論解析および理論設計、高機能の有機・無機材料の設計と合成、光触媒および酸塩基触媒などの高性能触媒の開発、有機太陽電池、機能性有機材料、薬物送達システムの開発、光化学反応を基礎とした大気環境化学、有機-無機ハイブリッド低温熔融ガラス材料の設計と合成、物質のダイナミクスと流動変形特性の分子論的解明、有機デバイスの創製と基礎科学の構築、固体 NMR による構造・有機デバイス機能相関の解明など、物質の理解と応用の本質に関わる広範な分野をカバーしています。



- ①有機太陽電池作製実験の様子。左手手前は真空蒸着機、右手奥はグローブボックスを用いた作業を行っている。
- ②カーボンナノチューブ（ジグザグ型）のフロンティア軌道。チューブの巻き方（ヘリシティ、チューブ直径）によって電気伝導特性が半導体から金属へと変化する。
- ③高光活性 Ge 含有 SiO<sub>2</sub> ガラス薄膜中にレーザ直接描画により形成した Y 一分岐型平面導波路。光誘起屈折率変化の発現機構を解明し、得られた知見に基づいて欠陥制御したガラス薄膜を化学蒸着法により作製した。

講座	分野名	教授	准教授	講師	助教
生体分子機能化学		白川 昌宏	枋尾 豪人		有吉 真理子
分子理論化学			佐藤 啓文		中尾 嘉秀
量子機能化学		田中 一義	伊藤 彰浩		笛野 博之
応用反応化学	触媒反応化学	田中 庸裕	穴戸 哲也		寺村 謙太郎
	光有機化学	今堀 博	俣野 善博		梅山 有和
	光反応化学		川崎 三津夫	橋本 訓	数下 彰啓
分子材料科学	無機分子材料	横尾 俊信			徳田 陽明
	分子レオロジー	渡辺 宏	増淵 雄一		正井 博和
	有機分子材料	梶 弘典	後藤 淳		松宮 由実
電子物性化学			佐藤 徹		畠山 多加志



# 高分子化学専攻

## Department of Polymer Chemistry

高分子は人類の現代生活を支える必需品として、産業の基幹となる資材として、さらに化学・繊維から医療や電子産業、航空宇宙分野まで、豊かな社会と先端技術を実現する機能材料として、幅広い領域に展開しています。21世紀に入って、高分子が活躍する分野はますます拡大し、人間社会における重要性も増しています。

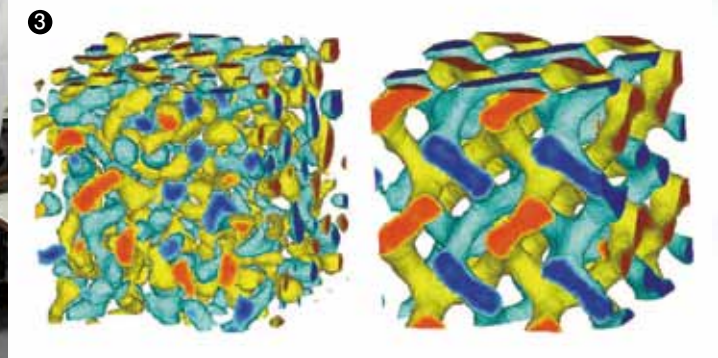
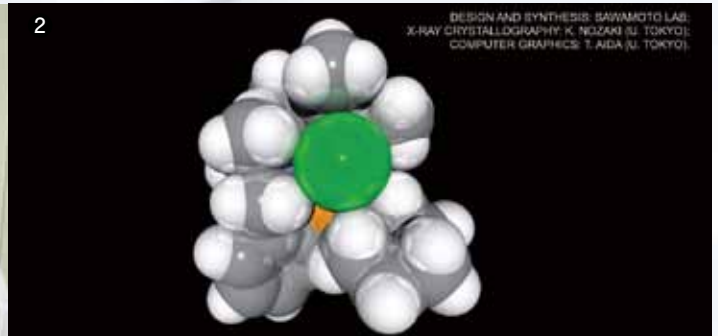
高分子化学は、基礎学問としての物質科学と、実用的なニーズを背景とする応用科学とが融合した学問分野であり、基礎-応用、合成-物性、理論-実験、有機-無機、ミクロ-マクロ等々、さまざまな視点において幅広いスペクトルをもつ分野です。したがって高分子化学専攻では、基幹講座として合成講座と物性講座および専任講座として先端機能

高分子講座を配し、多様で特色ある研究室が有機的に結びついて研究を行うとともに、下表のようにいくつもの部局に協力講座（化学研究所：3研究室、再生医科学研究所：2研究室）を有し、緊密なネットワーク研究体制を組織しています。

とくに当専攻では、光・電子・情報分野、高機能材料、再生医療、ナノテクノロジーなど、次々と生まれる高分子の発展分野を支えるため、高分子の生成、反応、構造、物性、機能について基礎研究と教育とを行うとともに、その成果を社会に還元し、関連する学術分野との連携を通して、新たな科学技術の創成に貢献することを目指しています。また、高分子を基礎とする先端領域において活躍できる能力を備えた研究者、

技術者の養成をしています。そのような実績が認められて2002年に21世紀 Center of Excellence(COE)、2005年に「魅力ある大学院教育」イニシアティブ、さらに2007年にグローバル COE「統合物質科学」に採択され、教育研究拠点として若手研究者の育成を積極的に行っています。

以上のように、本専攻は、幅広い高分子化学の各分野においてトップレベルの研究者が集まり一専攻を形成し、国際的にも高く評価されている組織であり、一分子の精密合成から集合構造の構築・制御、さらにマクロ物性・機能に至るまで、高分子物質の総合的研究に取り組むことにより、今後とも世界における高分子研究の中心として、教育研究活動を行います。



- ① 光散乱法による高分子の鎖の大きさと形態の測定。試料外の散乱を防ぐため、微小なチリもないクリーンな環境で測定される。
- ② 新発見の高活性重合触媒のCG図：中心の2個ルテニウム金属（橙）を取り囲む塩素（緑）と配位子。この触媒により、種々のモノマーから分子量と構造が制御された高分子を精密合成することができる。
- ③ 多成分高分子数千本（～数万本）の大規模シミュレーション。自己組織化（左→右）により周期的極小曲面構造が形成される様子が計算機科学により予測される。

講座	分野名	教授	准教授	講師	助教
先端機能高分子	先端機能高分子	長谷川 博一	三田 文雄 松岡 秀樹		塩月 雅士 西条 賢次
高分子合成	機能高分子合成	赤木 和夫			高 文柱
	高分子生成論	澤本 光男			大内 誠 寺島 崇矢
	重合化学	中條 善樹		森崎 泰弘	田中 一生
高分子物性	高分子機能学	伊藤 紳三郎	大北 英生		辨天 宏明
	生体機能高分子			竹中 幹人	
	高分子分子論	吉崎 武尚	中村 洋	長 昌史	
	基礎物理化学	田中 文彦	古賀 毅		
高分子設計 (協力講座)	高分子物質科学	金谷 利治	西田 幸次		井上 倫太郎
	高分子材料設計	辻井 敬亘	大野 工司		
	高分子制御合成	山子 茂	辻 正樹		
					登阪 雅聡 中村 泰之 山本 雅哉
医用高分子 (協力講座)	生体材料学	田畑 泰彦			有馬 祐介 外波 弘之
	組織修復材料学	岩田 博夫	加藤 功一		中路 正
	材料機能解析		青木 裕之		

# 合成・生物化学専攻

## Department of Synthetic Chemistry and Biological Chemistry

従来、合成化学と生物化学は独自の発展を遂げてきました。合成化学の主たる目的は物質を構成する分子の構造・物性・相互作用を理論・実証の両面から考察し、多彩な構造と機能を合理的に設計、合成する手法を確立することにあります。新しい理論・物質の創造が私達の生活の質を飛躍的に向上させ、新しい産業基盤を生み出してきました。生物化学は生命現象に関わる物質の構造と役割を化学的に明らかにすることを主な使命とし、生命科学技術の発展に大きく貢献してきました。近年、合成化学と生物化学のバリアは急速に狭まりつつあります。

本専攻では多彩な物質と機能を創り出す学問である合成化学と、生物の機能を

解明し利用する生物化学との学際領域を密接な連携をもとに開拓し、総合精密化学としての創造性豊かな化学分野を確立することを理念としています。合成化学講座及び有機設計学講座では、効率の合成を目指した物質変換の基礎と応用、無機・有機複合分子集積系の機能、さらに量子化学の立場から反応化学と生物化学の理論を構築することを目標にしています。生物化学講座では、分子/システム/細胞/生体(個体)など様々な階層における生命現象を分子レベルで理解し制御するとともに、生物機能・生体物質を利用し、斬新な機能を持つ物質を生み出すことを目指しています。新しい時代を見据え、社会に強く必要とされる、分野を越えた知識と創

造性を持つ人材を輩出することを目的に教育を行っています。



- ① 合成・生物化学専攻では、有機設計学、有機合成化学、有機金属化学、錯体化学、物理有機化学、生物有機化学、分子生物化学、生体認識化学、生物化学工学など分野を越えた英知を結集し、新しい学問を創造します。
- ② 研究の1例：微生物を用いた有用物質の生産
- ③ 研究の1例：新しい有機合成反応の開拓（不活性雰囲気下での実験）

講座	分野名	教授	准教授	講師	助教
有機設計学 合成化学	有機設計学	杉野目 道紀		大村 智通	長田 裕也
	有機合成化学	吉田 潤一			野上 敏材 永木 愛一郎
	機能化学	北川 進	大場 正昭		植村 卓史 堀毛 悟史
生物化学	物理有機化学	松田 建児		長谷川 淳也	東口 顕士
	有機金属化学	村上 正浩		三浦 智也	石田 直樹
	生物有機化学	浜地 格			池田 将
	分子生物化学	森 泰生			清中 茂樹 沼田 朋大 梶本 武利
	生体認識化学 生物化学工学	梅田 真郷 跡見 晴幸	世良 真史	金井 保	佐藤 喬草 山村 みどり
反応生命化学 (協力講座)			石田 俊正		

# 化学工学専攻

## Department of Chemical Engineering

人類に有用な機能をもつ物質および材料を化学的変換によって創出する。物質、材料、エネルギーを環境に優しく、効率よく生産する方法を提案する。化学工学専攻ではこのような課題について教育、研究を行っています。現在、以下のような様々なプロジェクトが進められています。

1. 複雑流体やソフトマターの移動現象を、主に計算科学的手法を用いて解明する。
2. ナノ拘束空間を舞台に、分子/イオン/ナノ粒子の挙動と構造や電場等の外場の効果を解明する。
3. 機能性材料合成や燃料電池などの反応プロセスを対象に、反応を操り、速度と質を制御する方法を開発する。
4. 均相系から不均相系への相転移過程に

おけるエネルギー、物質移動速度論を解明し、生成物の構造、機能を制御する。

5. 新しい反応スキームによる石炭・重質油・バイオマス・廃棄物などのエネルギー資源の高効率転換プロセスを開発する。
6. 機能性材料の物性や構造の発現機構を明らかにし、材料プロセッシングに関する方法論の確立を目指す。
7. 複雑な生産プロセスの開発、設計、運転、制御等を合理的に行うための方法論の開発とその体系化を行う。
8. 資源 - エネルギー - 環境の活動連鎖システムを合理的に組み上げた環境調和型プロセスの確立を目指す。
9. 粒子および粉体の性質を見極め、高機能化を図り、複合場を利用して粒子の挙

動を制御する。

化学工学の特徴は対象とするプロセスから要素となる現象を抽出し、その本質と動的特性を定量的に捉え、さらに、最適システムを構築して、物質、材料の高機能化と物質、エネルギーの効率的生産のための方法論を探求することにあります。本専攻の卒業生は、化学をはじめ機械、自動車、鉄鋼、食品、医薬、セラミックス、エネルギー、電機といった産業分野や大学、研究所で活躍しています。



講座	分野名	教授	准教授・講師	助教
化学工学基礎	移動現象論	山本 量一	谷口 貴志 新戸 浩幸	安田 修悟 (特) 浦長瀬 正幸 (特) 村島 隆治 (特) 石本 志高 (特)
	界面制御工学	宮原 稔		田中 秀樹 渡邊 哲
	反応工学		河瀬 元明	
化学システム工学	分離工学	田門 肇	佐野 紀彰	鈴木 哲夫
	エネルギープロセス工学	三浦 孝一		藤田 隆一
	材料プロセス工学	大嶋 正裕	長嶺 信輔	瀧 健太郎
	プロセスシステム工学	長谷部 伸治	加納 学	殿村 修
環境プロセス工学		前 一廣	牧 泰輔	長谷川 功 青木 宣明
粒子工学 (協力:産官学連携本部)		松坂 修二		丸山 博之
環境安全工学 (協力:環境保全センター)			中川 浩行	

2003年10月、京都の西部、桂御陵の37haの丘陵地に、京都大学桂キャンパスが開校しました。これにより、これまでの吉田地区、宇治地区のキャンパスと合わせて、京都市街中心部を取り囲むトライアングル構造の教育・研究拠点形成への第一歩を踏み出しました。

桂キャンパスには、工学研究科と情報学研究科が移転するほか、産官学連携センター、桂インテックセンターが設置され、また隣接地には京都市の桂イノベーションパークが開設されます。これらが協力し、科学と技術が融合する「テクノサイエンス・ヒル」としての発展をめざします。

同キャンパスでは、2010年4月現在、工学研究科の地球系専攻、建築学専攻、電気系・化学系専攻を中心に、教員約330名、大学院生約1,550名、職員・外国人研究者等、計約2,000名が教育・研究活動を行っています。また、工学研究科物理系専攻、情報学研究科が、今後吉田キャンパスから順次移転する予定です。完成後の桂キャンパスは、約4,000名が活動をする場となります。



# 京都大学 桂キャンパス

工学研究科の新たな研究拠点



# Whole View



## テクノサイエンス・ヒルの形成を目指して

### テクノサイエンス・ヒル桂

桂キャンパスは、科学と技術が融合する「テクノサイエンス・ヒル」の形成を目指します。「技術」、「地域」、「自然」が融合・交流することにより、工学研究科・情報学研究科に対する新時代の要請にこたえることのできる環境を創造します。

### 融合・交流

学際交流・国際交流・産学共同の場として、研究分野の枠組みを超えた様々な国際的・産学的融合と交流により、学問の新分野を生み出します。

### 技術

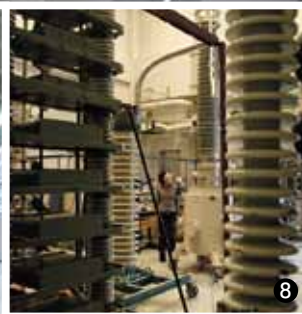
キャンパスを先端技術の実験の場ととらえ、柔軟性の高い施設構成、環境共生技術の導入など、新しい学問を生み出す仕組みについての実験的取り組みを行います。

### 地域

地域とともに発展する開かれたキャンパスを目指し、一般市民も利用できる施設を導入するとともに、地域の産学連携、ベンチャー支援等大学の社会貢献に具体的に取り組みます。

### 自然

環境と調和し、景観に新たな魅力を加えるよう配慮するとともに、自然との対話により創造性を刺激する自然環境調和型のキャンパスをめざします。



Cluster **A**



# Cluster B



### 写真の説明

左上

1: 桂キャンパスのゲートサイン 2: 桂キャンパス全体図 3: プロムナードから見た桂キャンパスのシンボルタワー 4: 桂キャンパスより京都市中心部を望む

左下

5: 建物配管類が外部から見えないよう建物内部の吹き抜けに集中させた「テクニカルスリット」 6: 実験室(化学系) 7: Aクラスター図書室 8: 実験室(電気系) 9: カフェ「ハーブムーンガーデン」 10: 各建物をつなぐ「コミュニケーションスクエア」

右上

11: 学際領域の研究拠点となる桂インテックセンター 12: 研究者交流の場として利用される「桂ラウンジ」より京都市街地を臨む 13: 桂インテックセンター テクノアメニティラボ(無響実験室) 14: 展望テラス(福利棟) 15: 地域の方々も利用できるキャンパス内のベーカリーカフェ「Lune(リュージュ)」 16: 保健管理センターヒーリングルーム(福利棟) 17: 保健管理センターフィットネスルーム(福利棟)

右左

18: 屋上植栽から望むCクラスター総合研究棟 19: Cクラスター総合研究棟大講義室 20: 研究室(地球系) 21: Cクラスター総合研究棟エントランスホール 22: 建築学専攻大会議室 23: 建築学専攻の建物 24: 建築学専攻構造系実験室 25: 建築学専攻環境系実験室



# Cluster C



# 大学院入学状況・大学院修了者数・博士学位授与者数

Enrollment・Completion・Conferral of degrees

## 修士課程

(平成22年4月1日現在)

入学志願者			入学者			
専攻	入学定員	志願者数	専攻	入学者数		
社会基盤工学	66	50 (6)	社会基盤工学	69	(5)	
都市社会学	64	49 (5)	都市社会学	56	(4)	
都市環境工学	36	102 (8)	都市環境工学	29	(4)	
建築学	72	70 (14)	建築学	69	(12)	
機械理工学	56	144 (7)	機械理工学	59	(3)	
マイクロエンジニアリング	28		マイクロエンジニアリング	26	(1)	
航空宇宙工学	23	29	航空宇宙工学	19		
原子核工学	23		原子核工学	22		
材料工学	38	50 (7)	材料工学	37	(3)	
電気工学	38	85 (12)	電気工学	37	(3)	
電子工学	35		電子工学	33	(2)	
材料化学	29	234 (9)	材料化学	27	(1)	
物質エネルギー化学	38		物質エネルギー化学	36	(1)	
分子工学	34		分子工学	32	(1)	
高分子化学	46		高分子化学	46	(2)	
合成・生物化学	31		合成・生物化学	31	(3)	
化学工学	31		43 (3)	化学工学	32	(1)
合計	688		856 (71)	合計	660	(46)

( ) は外国人留学生で外数である。

社会基盤工学専攻、都市社会学専攻、都市環境工学専攻、建築学専攻においては、再編により志願専攻と入学専攻が異なる学生が存在する。

## 博士後期課程

(平成22年4月1日現在)

入学志願者			入学者		
専攻	入学定員	志願者数	専攻	入学者数	
社会基盤工学	12	9 [4] (2)	社会基盤工学	12	[5] (1)
都市社会学	12	5 [2] (2)	都市社会学	6	[3] (2)
都市環境工学	10	8 [2] (7)	都市環境工学	3	(5)
建築学	24	2 (7)	建築学	1	(9)
機械理工学	18	11 [2] (1)	機械理工学	11	[2] (1)
マイクロエンジニアリング	8	6 (1)	マイクロエンジニアリング	5	(1)
航空宇宙工学	8	7 [1] (1)	航空宇宙工学	7	[1] (1)
原子核工学	9	3	原子核工学	3	
材料工学	10	6 [1] (3)	材料工学	4	[1] (2)
電気工学	10	4 (1)	電気工学	4	(1)
電子工学	10	12 (1)	電子工学	12	(1)
材料化学	9	4 [1]	材料化学	3	[1]
物質エネルギー化学	11	12 [1] (1)	物質エネルギー化学	9	[1] (1)
分子工学	12	5 (1)	分子工学	3	
高分子化学	15	7 [2] (5)	高分子化学	6	[1] (5)
合成・生物化学	10	7 [1]	合成・生物化学	7	[1]
化学工学	9	3 (1)	化学工学	3	(1)
合計	197	111 [17] (34)	合計	99	[16] (31)

[ ] は社会人特別選抜で内数、( ) は外国人留学生で外数である。

社会基盤工学専攻、都市社会学専攻、都市環境工学専攻、建築学専攻においては、再編により志願専攻と入学専攻が異なる学生が存在する。



## 大学院修了者数

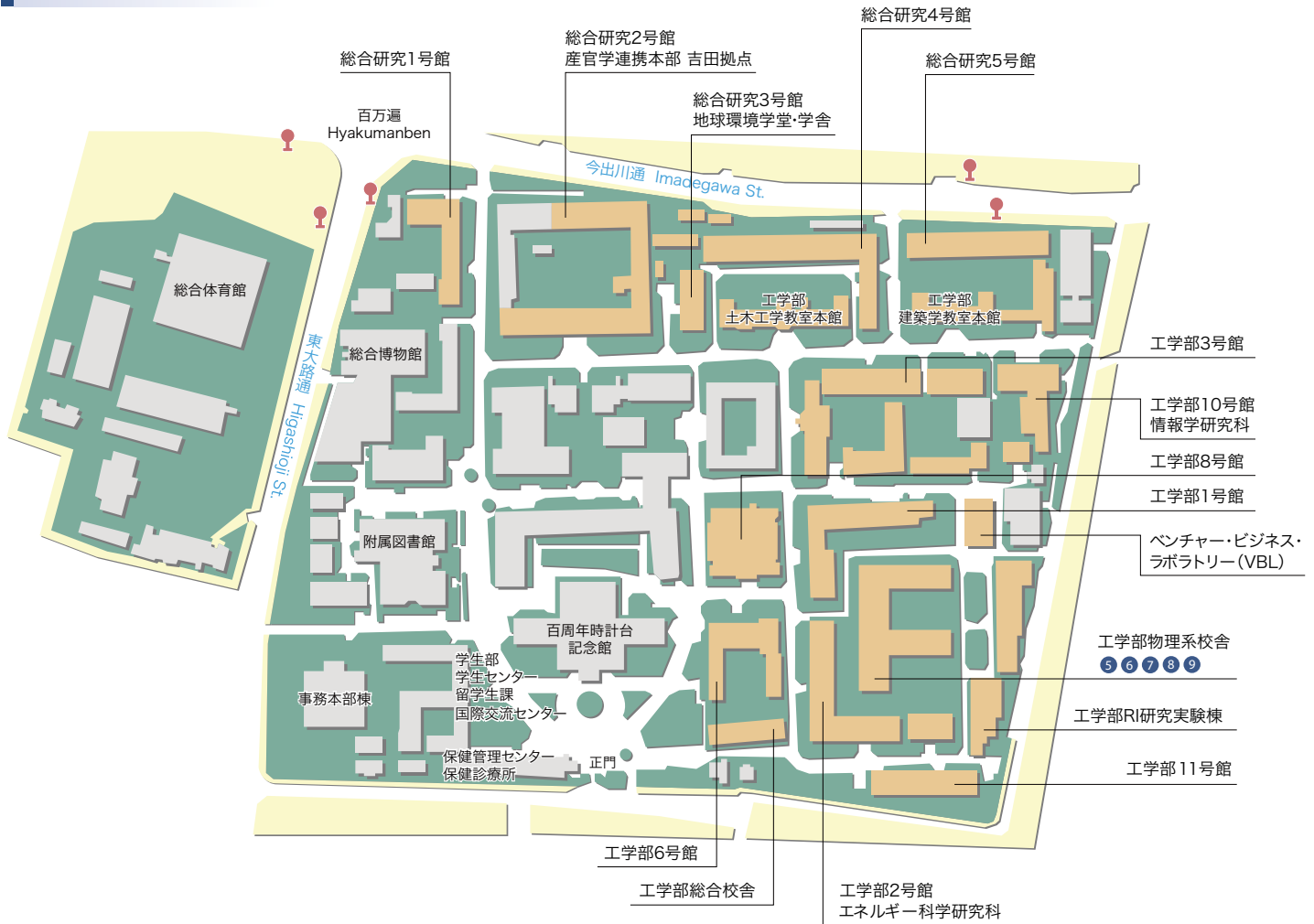
専攻	修士課程		博士課程（認定退学）
	平成21年度	累計	平成21年4月1日現在研究指導認定退学者累計
社会基盤工学	44	256	8
都市社会工学	49	285	10
都市環境工学	90	516	24
土木工学		1,996	143
交通土木工学		598	14
土木システム工学		240	23
資源工学		681	40
衛生工学		620	54
環境工学		205	8
環境地球工学		501	30
建築学	51	1,540	143
建築学第二		514	51
生活空間学		159	17
機械理工学	64	237	4
マイクロエンジニアリング	26	101	7
機械工学		1,154	78
物理工学		462	38
機械物理工学		212	6
精密工学		860	56
原子核工学	21	960	136
冶金学		634	47
金属加工学		567	43
材料工学	38	518	9
エネルギー応用工学		57	2
航空工学		388	32
航空宇宙工学	25	260	12
電気工学	27	1,157	98
電子工学	36	1,024	79
電子物性工学		227	15
電気工学第二		730	67
電子通信工学		110	2
数理工学		785	84
情報工学		508	44
応用システム科学		342	10
工業化学		1,263	212
材料化学	30	417	20
石油化学		758	137
物質エネルギー化学	34	545	27
分子工学	29	691	50
高分子化学	51	1,603	268
合成化学		582	157
合成・生物化学	28	455	51
化学工学	32	1,210	111
合計	675	26,928	2,467

## 博士学位授与者数

区分		工学博士
旧制	大正9年6月以前の学位令によるもの	42（※28）
	大正9年7月以降の学位令によるもの	1,338
新制	大学院博士課程修了者	3,291
	論文提出によるもの	4,042
合計		8,713（※28）

（ ）内※印は推薦によるもので内数である。

## 吉田キャンパス



### 吉田キャンパスへの交通

主要鉄道駅	乗車バス停	乗車バス系統等	下車バス停
京都駅 (JR・近鉄)	京都駅前	市バス 206 系統(東山通 北大路バスターミナル行き) 市バス 17 系統(河原町通 錦林車庫行き)	「京大正門前」 または 「百万遍」
阪急河原町駅	四条河原町	市バス 201 系統(祇園 百万遍行き) 市バス 31 系統(高野・岩倉行き) 市バス 3 系統(百万遍 北白川仕伏町行き) // (上終町京都造形芸大前行き) 市バス 17 系統(河原町通 銀閣寺・錦林車庫行き)	
地下鉄烏丸線 今出川駅	烏丸今出川	市バス 201 系統(百万遍・祇園行き) 市バス 203 系統(銀閣寺道・錦林車庫行き) 市バス 102 系統([急行] 出町柳駅・銀閣寺行き)	
地下鉄東西線 東山駅	東山三条	市バス 206 系統(高野・千本北大路行き) 市バス 201 系統(百万遍 千本今出川行き) 市バス 31 系統(修学院・岩倉行き)	
京阪出町柳駅		当駅下車東へ徒歩約 20 分	

### 桂キャンパスへの交通

主要鉄道駅	乗車バス停	乗車バス系統等	下車バス停
阪急桂駅	桂駅西口	市バス 西 6 系統(桂坂中央行き) 京都交通 (桂坂中央行き)	「京大桂キャンパス前」

### 宇治キャンパスへの交通

主要鉄道駅	駅からのアクセス
JR 黄檗駅・京阪黄檗駅	当駅下車西へ徒歩約 10 分

## 桂キャンパス

**Cクラスター**  
工学研究科ゾーン  
地球系・建築系専攻

総合研究棟 IV  
(建築系) ④

総合研究棟 V  
(地球系) ① ② ③

事務管理棟

桂インテックセンター

船井哲良記念講堂

Aクラスター事務棟

総合研究棟 II(電気系) ⑩ ⑪

Dクラスター

**Bクラスター**  
共通施設ゾーン

福利棟

船井交流センター

総合研究棟 I(化学系)  
⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰

**Aクラスター**  
工学研究科ゾーン  
化学系・電気系専攻

### 各専攻研究棟案内

- |                  |               |
|------------------|---------------|
| ① 社会基盤工学専攻       | ⑩ 電気工学専攻      |
| ② 都市社会工学専攻       | ⑪ 電子工学専攻      |
| ③ 都市環境工学専攻       | ⑫ 材料化学専攻      |
| ④ 建築学専攻          | ⑬ 物質エネルギー化学専攻 |
| ⑤ 機械理工学専攻        | ⑭ 分子工学専攻      |
| ⑥ マイクロエンジニアリング専攻 | ⑮ 高分子化学専攻     |
| ⑦ 航空宇宙工学専攻       | ⑯ 合成・生物化学専攻   |
| ⑧ 原子核工学専攻        | ⑰ 化学工学専攻      |
| ⑨ 材料工学専攻         |               |

## 宇治キャンパス

風洞実験室

超空気力学実験室

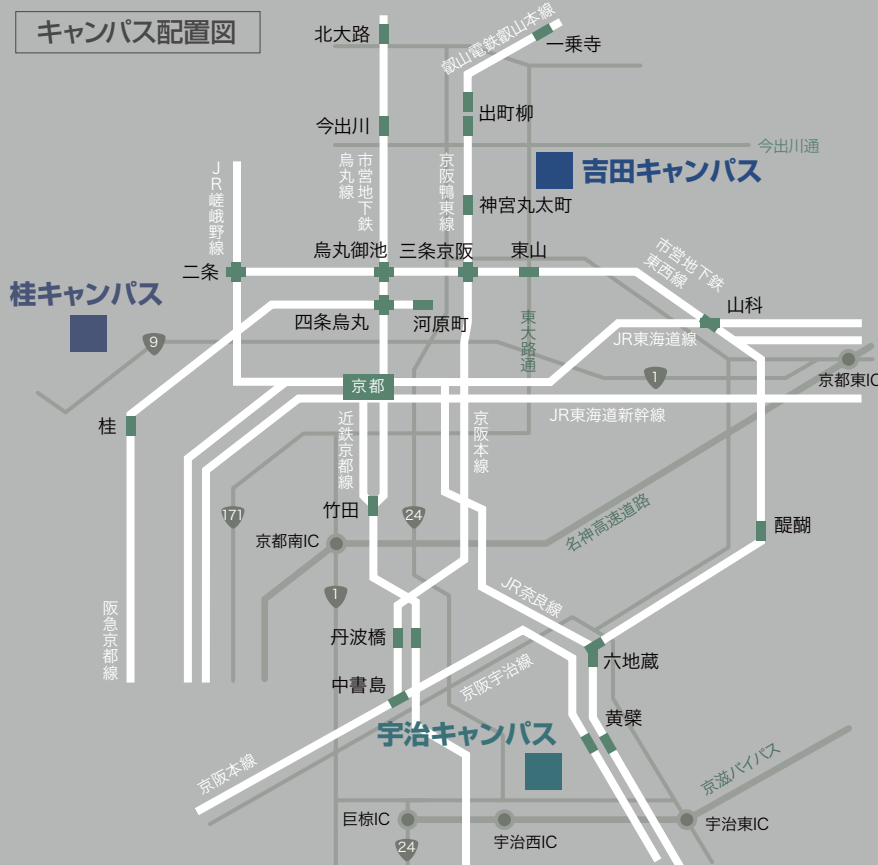
放射実験室  
量子理工学教育研究センター

京都大学ローム記念館  
産官学連携本部

正門

宇治地区研究所本館  
宇治地区事務部

### キャンパス配置図



### お問い合わせ先

●事務的事項について  
工学研究科教務課大学院掛  
Tel : 075-383-2040, 2041

●各専攻に関わることに  
社会基盤工学専攻  
都市社会工学専攻  
都市環境工学専攻  
建築学専攻  
機械理工学専攻  
マイクロエンジニアリング専攻  
航空宇宙工学専攻  
原子核工学専攻  
材料工学専攻  
電気工学専攻  
電子工学専攻  
材料化学専攻  
物質エネルギー化学専攻  
分子工学専攻  
高分子化学専攻  
合成・生物化学専攻  
化学工学専攻

Tel : 075-383-2969  
Tel : 075-383-2970  
Tel : 075-753-5181  
Tel : 075-383-2077

京都大学工学研究科のホームページ  
<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/ja>

編集・発行:

京都大学工学研究科教務課大学院掛  
京都市西京区京都大学桂 〒615-8530  
Tel. 075-383-2040,2041  
Fax. 075-383-2038

平成22年6月発行